

# 5. 英語教育の改善・充実について

# 現行学習指導要領の概要

## 基本的考え方

### ○小中高を通じて、**コミュニケーション能力を育成。**

- 言語や文化に対する理解を深める
- 積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成する
- 「聞く」「話す」「読む」「書く」の4技能をバランスよく育成する

### ○指導語彙を充実(中高を通じて 2, 200語 から 3, 000語 に)

## I. 小学校学習指導要領(平成20年3月改訂)(平成23年度から実施)

- 平成23年度より、**5・6年生において、外国語活動を週1コマ導入。**平成21年度及び22年度は、学校の判断により先行実施が可能。教科としては位置づけず(成績評価は文章による記述)。
- 音声や基本的な表現に慣れ親しむことを中心
- 学級担任または外国語を担当する教員による実施が中心(ネイティブ・スピーカーや外国語に堪能な地域の人々の協力)

## II. 中学校学習指導要領(平成20年3月改訂)(平成24年度から実施)

- 各学年の授業時数を**週3コマから週4コマ(約3割増)へ充実**
- 従前の「聞く」「話す」を重視した指導から**4技能のバランス取れた指導への改善**
- 指導語彙を900語から1, 200語へ充実

## III. 高等学校学習指導要領(平成21年3月改訂)(平成25年度から年次進行で実施)

- 選択必修から「コミュニケーション英語Ⅰ」の共通必修に変更する等、科目構成を変更
- 生徒が英語に触れる機会を充実するとともに、授業を実際のコミュニケーションの場面とするため、授業は生徒の理解の程度に応じた**英語を用いて行うことを基本とする**ことを明示
- 指導語彙を1, 300語から1, 800語へ充実(※)

(※) コミュニケーション英語Ⅰ、Ⅱ及びⅢを履修した場合。

# 中学校新学習指導要領（平成24年度～）の取組について

平成24年度より、中学校に新学習指導要領を導入後、

- 中学校教員：英語の授業で「発話をおおむね英語で行っている」、「発話の半分以上を英語で行っている」と答えた教員を合わせて **1年生 58.3%、2年生 56.9%、3年生 54.8%**
- 中学校生徒：英語授業における生徒の英語による言語活動時間の割合は「おおむね言語活動を行っている」と「半分以上の時間言語活動を行っている」を合わせて **1年生 69.1%、2年生 66.0%、3年生 62.6%**
- 学習到達目標：「CAN-DOリスト」の形で学習到達目標を設定している学校数の割合は **平成27年度 51.1%**  
など、教員が授業を英語で展開し、生徒の英語による言語活動が授業の中心になってきているとともに、各中学校において「CAN-DOリスト」の形で明確な学習到達目標を設定しつつある傾向が見られる。

「平成25年度公立中学校・中等教育学校（前期課程）における英語教育実施状況調査」

## <授業改善の事例>

- 秋田県大仙市立大曲中学校  
メモに基づいたスピーキング指導
  - ・「読むこと」「話すこと」の授業改善
  - ・「即興力」の重視
- 和歌山県有田市立初島中学校  
考えながら話す言語活動
  - ・単元目標と学習到達目標との関連付け
- 静岡県裾野市立東中学校  
小学校・高等学校との連携
  - ・連携を生かした授業改善
  - ・高等学校と連携した学習到達目標の設定
- 北海道弟子屈町立弟子屈中学校  
年間指導計画における工夫
  - ・「CAN-DOリスト」の形での学習到達目標を冒頭に配置
  - ・各単元の目標と関連する学習到達目標の明示

## 「CAN-DOリスト」の形での学習到達目標設定に関わる取組事例

- 島根県教育委員会  
学習到達目標を県内全中学校で設定
  - 県版「ガイドブック」の作成・配付
  - 指導主事による各学校への支援
- 青森県教育委員会  
年間指導計画のフォーマットを提示
  - 各単元の目標と「CAN-DOリスト」の形での学習到達目標との関連を明記するものに
- 沖縄県教育委員会  
教育事務所レベルで「CAN-DOリスト」の形での学習到達目標設定のための研修を実施
  - 年間指導計画の見直しからスタート  
(各単元の目標を「能力」の面で1点に絞り込み)

## 秋田県大仙市立大曲中学校

### I 学校・地域における教育活動

#### 1. 言語活動における「即興力」の育成

- ・「話すこと」についてスモールステップを踏んだ指導
- ・メモに基づいたスピーキング指導
- ・二種類以上の技能を統合した指導
- ・「CAN-DOリスト」の形での学習到達目標に「即興力」を設定

#### 2. 英語科教員のチームワークづくり

- ・「CAN-DOリスト」の形での学習到達目標設定
- ・方向目標の共有化

#### 3. 地域全体での指導力・評価力の向上

- ・拠点校が方向性と実践事項を提案、協力校で焦点化された項目を共通実践

### II 成果・効果

- ・「CAN-DOリスト」の形での学習到達目標設定により、授業計画が立てやすくなった。
- ・生徒と教員が目標を共有することで、生徒がより意欲的に学習に取り組むようになった。
- ・ドリル中心の活動が減り、生徒の発話量が増えた。
- ・拠点校・協力校制度により、拠点校と協力校で差を生じさせることなく、取り入れた手法の効果の波及が期待できる。

## 島根県教育委員会

### I 島根県の中学校外国語教育の現状

- ・「CAN-DOリスト」の形での学習到達目標についての理解が不十分
- ・評価場面で、その単元でめざす力が適切に評価されていない。
- ・旧態依然とした授業が行われている学校が少なくない。
- ・小規模学校が多く、外国語科教員が1名の学校が多い。
- ・新たな研修を実施することが難しい。

### II 学習目標設定に向けた学校への支援

- ・学習到達目標の作成を通じて、「4技能を総合的に指導すること」や「指導と評価の改善」につながることへの理解
- ・作成ガイドの作成、研修、6月末に県内全校作成完了(予定)

### III 成果・効果

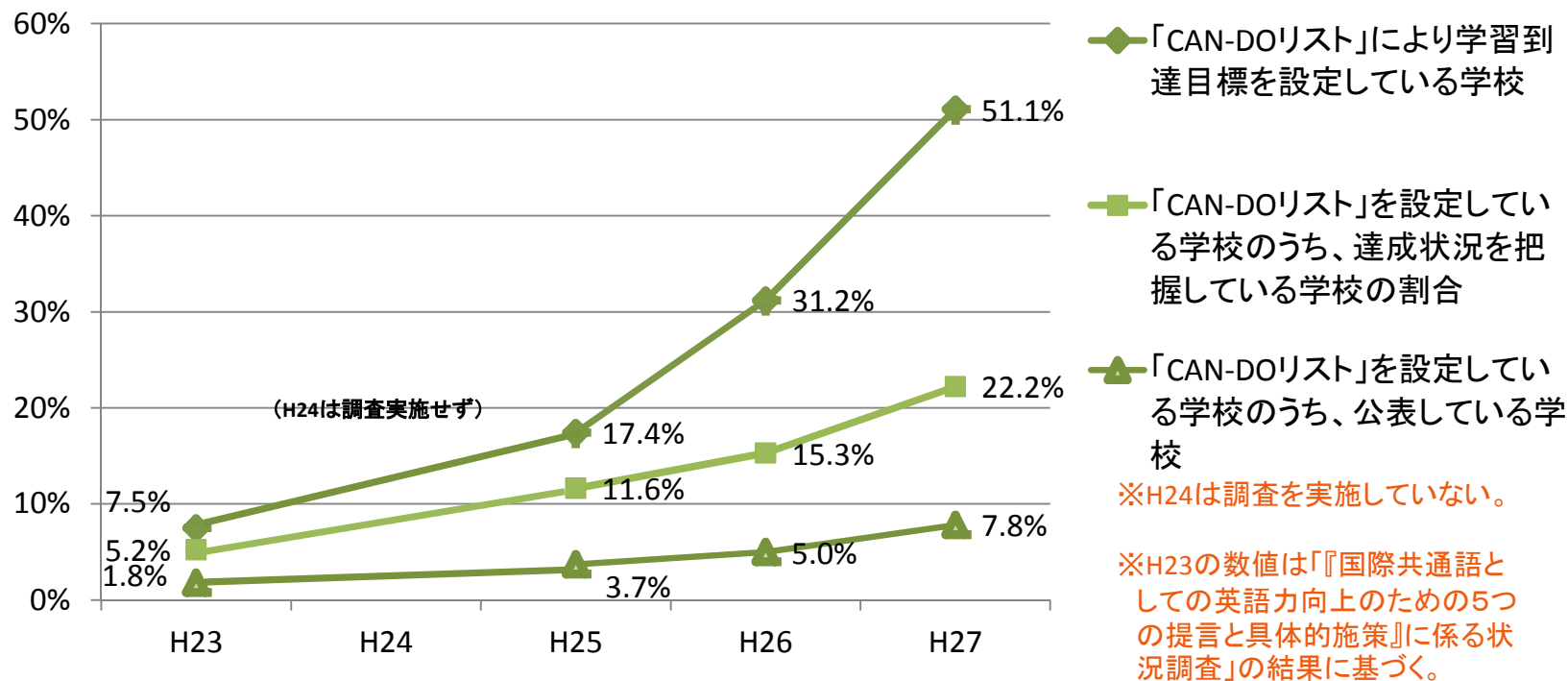
#### ○教員の意識変容

- ・単元のねらいが明確になり、何を指導して、何を評価したら良いか明確になった。
- ・単元計画が立てやすくなった。
- ・年間を通して4技能をバランスよく指導し、評価できるようになった。
- ・授業の言語活動が充実し、生徒が意欲的になった。
- ・校内で作成し、英語教員同士で情報を共有したり改善したりする機会になった。 等

# 各学校における学習到達目標（「CAN-DOリスト」）の設定

- 「CAN-DOリスト」により学習到達目標を設定している学校は51.1%で、平成23年度の7.5%から43.6ポイント上昇、平成26年度の31.2%から19.9ポイント上昇している。
- 「CAN-DOリスト」により学習到達目標を設定している学校のうち、22.2%の学校では、設定した学習到達目標の達成状況を把握しており、平成23年度の5.2%から17ポイント上昇、平成26年度の15.3%から6.9ポイント上昇している。

「CAN-DOリスト」による学習到達目標の設定・公表・達成状況の把握



●平成27年度に「CAN-DOリスト」を100%設定している都道府県数 →11

●研修、モデルの提示等教育委員会が実施

※H24は調査を実施していない。

※H23の数値は『国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策』に係る状況調査の結果に基づく。

# 平成27年度 生徒・教員の英語力及び指導状況について

## ■生徒の英語力について、目標としている英語力を達成している

生徒は公立中学3年生で約36.6%(約34%)、公立高校3年生で約34.3%(約32%)

○中学校卒業段階：初歩的な英語を聞いたり読んだりして話し手や書き手の意向などを理解したり、初歩的な英語を用いて自分の考えなどを話したり書いたりすることができる。(英検であれば3級程度以上)

○高等学校卒業段階：英語を通じて、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりすることができる。(英検であれば準2級～2級程度以上)

## ■英語教員の英語力についても、目標を達成している教員は

公立中・高それぞれ約30.2%及び約57.3%。

○生徒の英語によるコミュニケーション能力を育成するため、生徒が英語に触れる機会を充実するとともに、授業を実際のコミュニケーションの場面とすることができる。(英検準1級以上、TOEFLのPBT550点以上、CBT213点以上、iBT80点以上またはTOEIC730点以上)

## ■授業中、発話を半分以上英語で行っている英語教員は、公立中学校3年生担当で

約54.8%、公立高校3年生(コミュニケーション英語Ⅰ)担当で約49.6%。

## ■「CAN-DOリスト」により学習到達目標を設定している学校は、公立中・高それぞれ約

51.1%(31.2%)及び約69.6%(58.3%)。

※「CAN-DOリスト」とは、英語を使って実際にどのようなことができるようになるのか、その能力を記述したものを指す。

## ◆ 第2期教育振興基本計画（平成25年6月14日閣議決定）（抜粋）

### 成果目標5（社会全体の変化や新たな価値を主導・創造する人材等の養成）

「社会を生き抜く力」に加えて、卓越した能力※を備え、社会全体の変化や新たな価値を主導・創造するような人材、社会の各分野を牽引するリーダー、グローバル社会にあって様々な人々と協働できる人材、とりわけ国際交渉など国際舞台で先導的に活躍できる人材を養成する。

これに向けて、実践的な英語力をはじめとする語学力の向上、海外留学者数の飛躍的な増加、世界水準の教育研究拠点の倍増などを目指す。

※能力の例：国際交渉できる豊かな語学力・コミュニケーション能力や主体性、チャレンジ精神、異文化理解、日本人としてのアイデンティティ、創造性など

### 【成果指標】

＜グローバル人材関係＞

#### ①国際共通語としての英語力の向上

・学習指導要領に基づき達成される英語力の目標（中学校卒業段階：英検3級程度以上、高等学校卒業段階：英検準2級程度～2級程度以上）を達成した中高校生の割合50%

②英語教員に求められる英語力の目標（英検準1級、TOEFL iBT80点、TOEIC730点程度以上）を達成した英語教員の割合（中学校：50%、高等学校：75%）

## ◆ 今後の英語教育の改善・充実方策について 報告

（H26年9月26日 英語教育の在り方に関する有識者会議）（抜粋）

生徒の英語力の目標については、「第2期教育振興基本計画」（平成25年6月14日閣議決定）において、中学校卒業段階で英検3級程度以上、高等学校卒業段階で英検準2級程度～2級程度以上を達成した中高生の割合を50%とすることとされている。この実現に向けて取り組むとともに、高等学校卒業時に、生涯にわたり「聞く」「話す」「読む」「書く」の4技能を積極的に使えるようになる英語力を身に付けることを目指す。

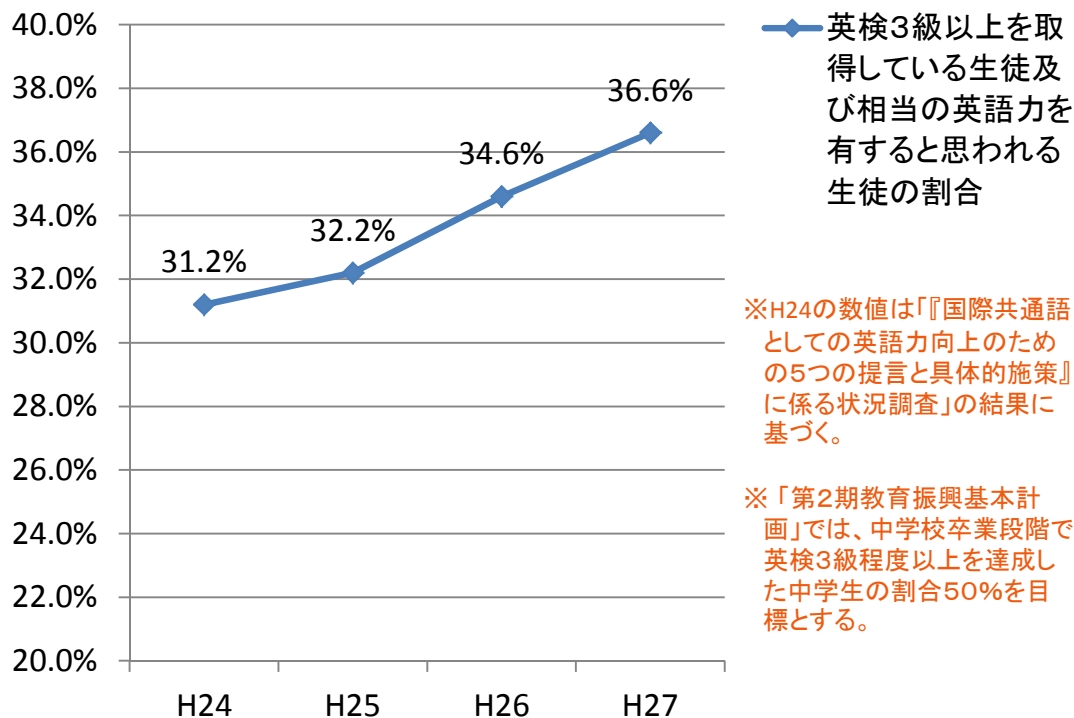
あわせて、生徒の英語力の目標を設定し、調査による把握・分析を行い、きめ細かな指導改善・充実、生徒の学習意欲の向上につなげる。これまでに設定されている英語力の目標だけでなく、高校生の特性・進路等に応じて、高等学校卒業段階で、例えば英検2級から準1級、TOEFL iBT60点前後以上等を設定し、生徒の多様な英語力の把握・分析・改善を行うことが必要。

## < 中学校 >

### 中学生の英語力の状況

- 中学校第3学年に所属している生徒のうち、英検3級以上を取得している生徒は18.9%で、平成26年度の18.4%から0.5ポイント上昇している。
- 英検3級以上を取得してはいないが、相当の英語力を有すると思われる生徒は17.7%で、平成26年度の16.3%から1.4ポイント上昇している。
- 両者を合わせると36.6%となり、平成26年度の34.6%から2ポイント上昇している。

### 中学生の英語力の状況

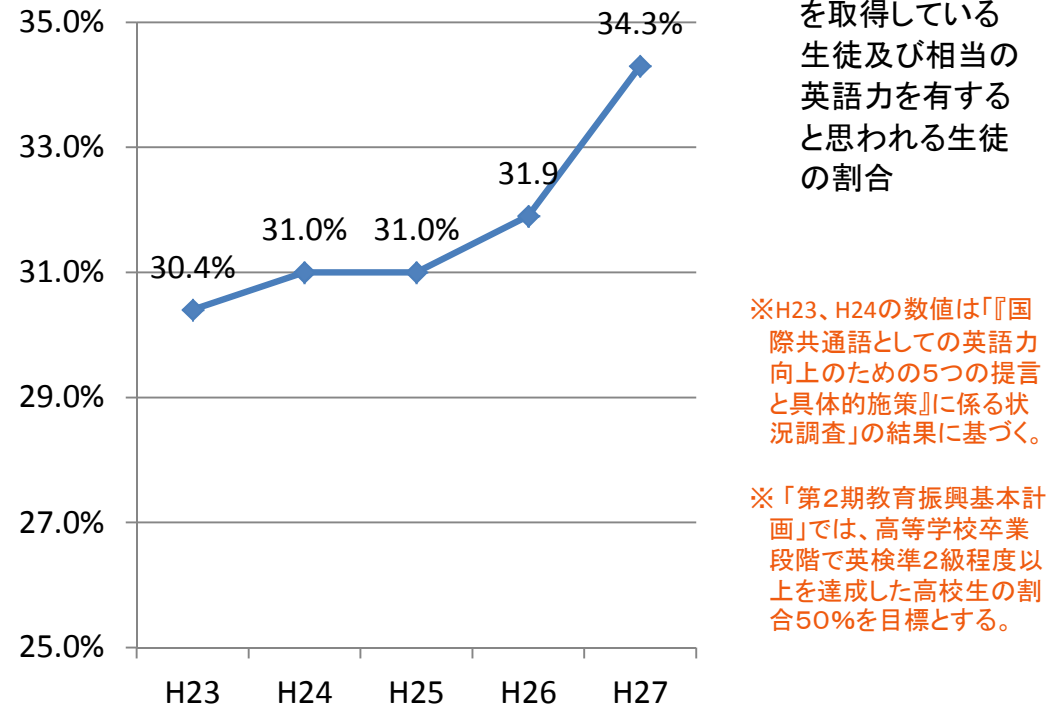


## < 高等学校 >

### 高校生の英語力の状況

- 高等学校第3学年に所属している生徒のうち、英検準2級以上を取得している生徒は11.5%で、平成26年度の11.1%から0.4ポイント上昇している。
- 英検準2級以上を取得してはいないが、相当の英語力を有すると思われる生徒は22.8%で、平成26年度の20.8%から2.0ポイント上昇している。
- 両者を合わせると34.3%となり、平成26年度の31.9%から2.4ポイント上昇している。

### 高校生の英語力の状況





## (参考) 平成27年度中学3年生の英語力について (アンケート調査より)

英検3級程度 (CEFR : A1レベル上位) の生徒が約3割

英検3級程度以上 (CEFR : A1レベル上位) の公立中学校3年の生徒数について教育委員会を通じてアンケートを実施

23年度	24年度	25年度	26年度	27年度
30%	31%	31%	35%	36%

### 【中学校及び中等教育学校 (前期課程)】

	中学校第3学年に所属している生徒数…(a)	(a)の内、英検を受験したことがある生徒数…(b)	(b)の内、英検3級以上を取得している生徒数…(c)	(a)の内、英検3級以上相当の英語力を有すると思われる生徒数 [(c)以外]…(d)	(c)と(d)の計
生徒数及び割合	1,074,886人 (1,078,270人)	381,307人 (356,841人)	202,816人 (198,182人)	190,155人 (175,417人)	392,971人 (373,599人)
	((a)に占める割合)→	35.5% (33.1%)	18.9% (18.4%)	17.7% (16.3%)	36.6% (34.6%)

注) 「英検3級以上相当の英語力を有すると思われる生徒数」とは、英検3級以上は取得していないが、相当の英語力を有していると英語担当教員が判断する生徒の人数を指す。

出典：「英語教育実施状況調査」(H27年)

# 平成27年度高校3年生の英語力について（アンケート調査より）

## 英検準2～2級程度（CEFR：A2～B1レベル）の生徒が約3割

英検準2級～2級程度以上（CEFR：A2～B1レベル）の公立高校3年の生徒数について教育委員会を通じてアンケートを実施

23年度	24年度	25年度	26年度	27年度
30%	31%	31%	32%	34%

### 【高等学校及び中等教育学校（後期課程）】

	高等学校第3学年に所属している生徒数…(a)	(a)の内、英検を受験したことがある生徒数…(b)	(b)の内、英検準2級以上を取得している生徒数…(c)	(a)の内、英検準2級以上相当の英語力を有すると思われる生徒数[(c)以外]…(d)	(c)と(d)の計
普通科等	705,328 人 (707,511人)	230,685 人 (230,300人)	77,980 人 (74,141人)	160,486 人 (146,465人)	238,466 人 (220,606人)
	((a)に占める割合)→	32.7% (32.6%)	11.1% (10.5%)	22.8% (20.7%)	33.8% (31.2%)
英語教育を主とする学科	7,031 人 (9,300人)	5,038 人 (6,967人)	3,886 人 (5,172人)	2,245 人 (2,845人)	6,131 人 (8,017人)
	((a)に占める割合)→	71.7% (74.9%)	55.3% (55.6%)	31.9% (30.6%)	87.2% (86.2%)
合計	712,359 人 (716,811人)	235,723 人 (237,267人)	81,866 人 (79,313人)	162,731 人 (149,310人)	244,597 人 (228,623人)
	((a)に占める割合)→	33.1% (33.1%)	11.5% (11.1%)	22.8% (20.8%)	34.3% (31.9%)

注)「英検準2級以上相当の英語力を有すると思われる生徒数」とは、英検準2級以上は取得していないが、相当の英語力を有していると英語担当教員が判断する生徒の人数を指す。

## 児童生徒の英語に対する意識

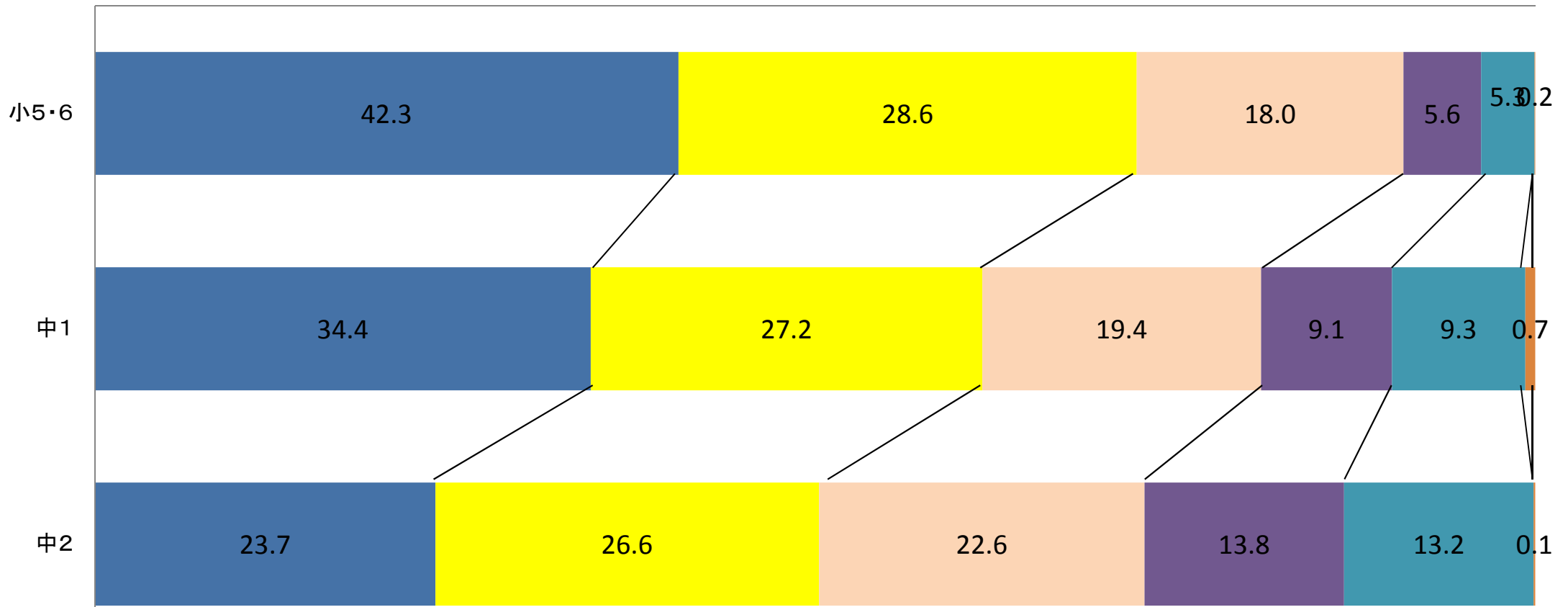
### 英語に対する意識

○ 小学校5,6年生の70.9%、中学1年生の61.6%、中学2年生の50.3%が「英語が好き」と回答。

Q. あなたは、英語が好きですか。(単一回答)

■好き ■どちらかといえば好き ■どちらともいえない ■どちらかといえば嫌い ■嫌い ■無回答

0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%



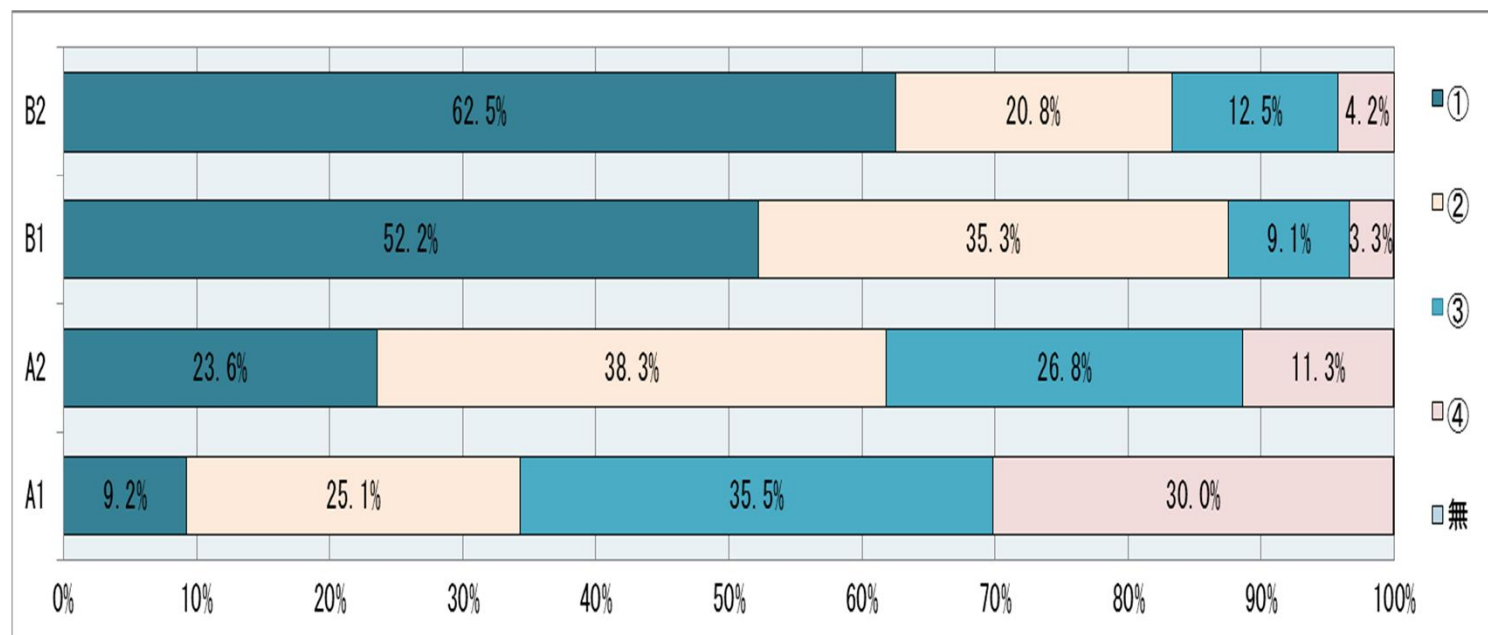
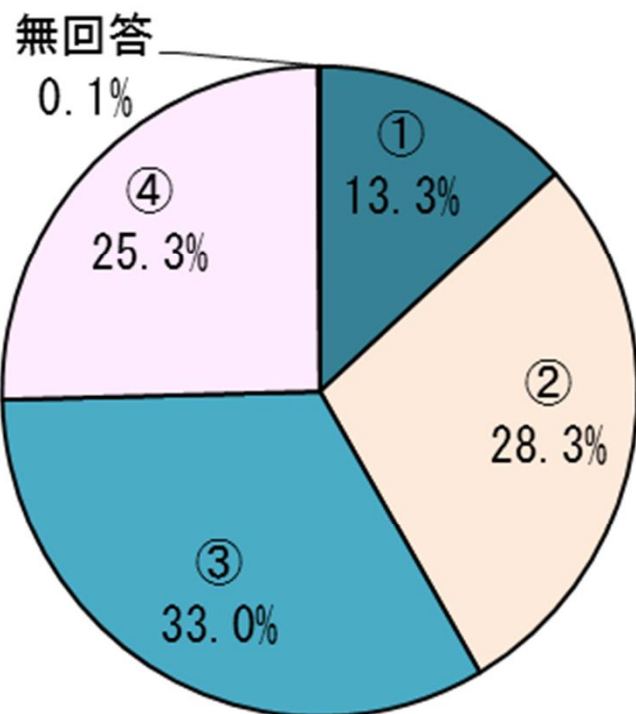
# 参考：英語学習に対する高校3年生の意識

## 生徒の英語学習に対する意識①

○英語が好きではない（選択肢③④）との回答が半数を上回る。特にA1レベルにおいて顕著（公立）。

問 英語の学習は好きですか。最も当てはまる選択肢を1つ選んでください。

① そう思う ② どちらかといえば、そう思う ③ どちらかといえば、そう思わない ④ そう思わない



※「読むこと」のテスト結果とのクロス

# 小学校外国語活動(5, 6年生)の成果・効果について

平成23年度より、小学校高学年(5, 6年生)に外国語活動(週1コマ)を導入後、

○児童生徒:小学生の72.3%(71.7%)が「英語の授業が好き」、91.5%(91.5%)が「英語が使えるようになりたい」、中学1年生の8割以上が、小学校の外国語活動で行った「アルファベットを読むこと」や「英語で簡単な会話をする」が「中学校で役立っている」と回答。

○小学校教員:導入前と比べ、高学年児童に「成果や変容がみられた」と感じる教員が76.6%(76.5%)

○中学校教員:導入前と比べ、中1の生徒に「成果や変容がみられた」と感じる教員が65.3%(77.8%)

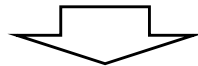
その変容として、外国語によるコミュニケーションへの積極的な関心・意欲・態度のみならず、英語を聞いたり話したりする力もついてきていると挙げている。

(出典:平成26年度小学校外国語活動実施状況調査)

※上記( )内の数値は、H23,24実施の調査結果

## 【現状】

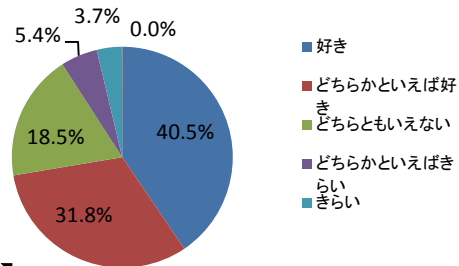
**目標:**外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。



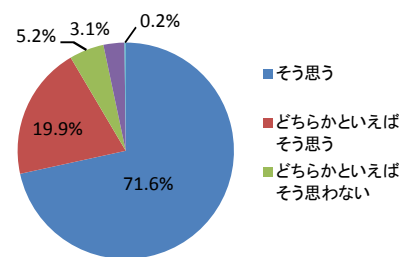
## 【成果】

○外国語活動に肯定的な児童が多い。

Q 英語の授業は好きですか



Q 英語が 使えるようになりたいですか



出典:小学校外国語活動実施状況調査(H24年)

## 【課題】

○中学1年生の約8割が、小学校で「英単語・文を読む」「英単語・文を書く」ことをもってしておきかかったと回答。

○①ALT等と打合せや教材研究をする時間の確保、②外国語活動の指導力、指導力向上のための研修機会が不十分であると感じている。

◆中学1年生は、小学校外国語活動の授業で学んだことが中学校の英語の授業で役だったと考えている。特に「話す」「聞く」ことで役立ったと回答。

	構成比
英語で簡単な会話をする	82.8%(80.5%)
英語の発音を練習すること	75.8%(73.7%)
友だちや先生などが英語で話しているのを聞くこと	73.2%(71.7%)
英語で自分のことや意見を言うこと	55.5%(53.9%)
英単語を読むこと	72.9%(68.4%)
英語の文を読むこと	60.8%(53.3%)

出典:平成26年度小学校外国語活動実施状況調査(H26年)  
※( )内の数値は、H24実施の調査結果

## ◇東京都における小学校外国語活動の成果

東京都中学校英語教育研究会より

- 小学校外国語活動の影響で臆することなく、コミュニケーションができる生徒が増加
- 小学校外国語活動の効果で、音声に慣れている。
- 低・中学年で週2時間外国語活動を行っている地区では中学に入った段階で文字が読める・書ける。

(参考)主な課題

- 中学校入学以前に、「英語は苦手」と感じる生徒がいる。

東京都A区より

- 小学校外国語活動の影響で臆することなく、コミュニケーションができる生徒が増加
- コミュニケーションへの関心・意欲・態度の高まり
- 小学校外国語活動の効果で、音声に慣れている。

# 小学校外国語活動(5, 6年生)の成果・効果について (中学1年生対象調査結果より)

出典: 小学校外国語活動実施状況調査(H26) 小学校5, 6年児童約2万人、中学校1・2学生徒約2万人、小学校管理職・学級担任、中学校管理職・外国語科担当教員それぞれ約3千人を対象に調査

## 小学校外国語活動が中学校でどのように役立ったか (中1)

- 「小学校の外国語活動で学んだことの中で、中学校の英語の授業で役に立ったこと」として、  
 生徒の88.8%が「アルファベットを読むこと」(86.8%)、  
 83.9%が「アルファベットを書くこと」(80.7%)、  
 82.8%が「英語で簡単な会話をする事」(80.5%)、  
 75.8%が「英語の発音を練習すること」(73.7%)、  
 と回答。

( )内は、24年度調査結果

## 小学校の外国語活動でもっと学習しておきたかったこと (中1)

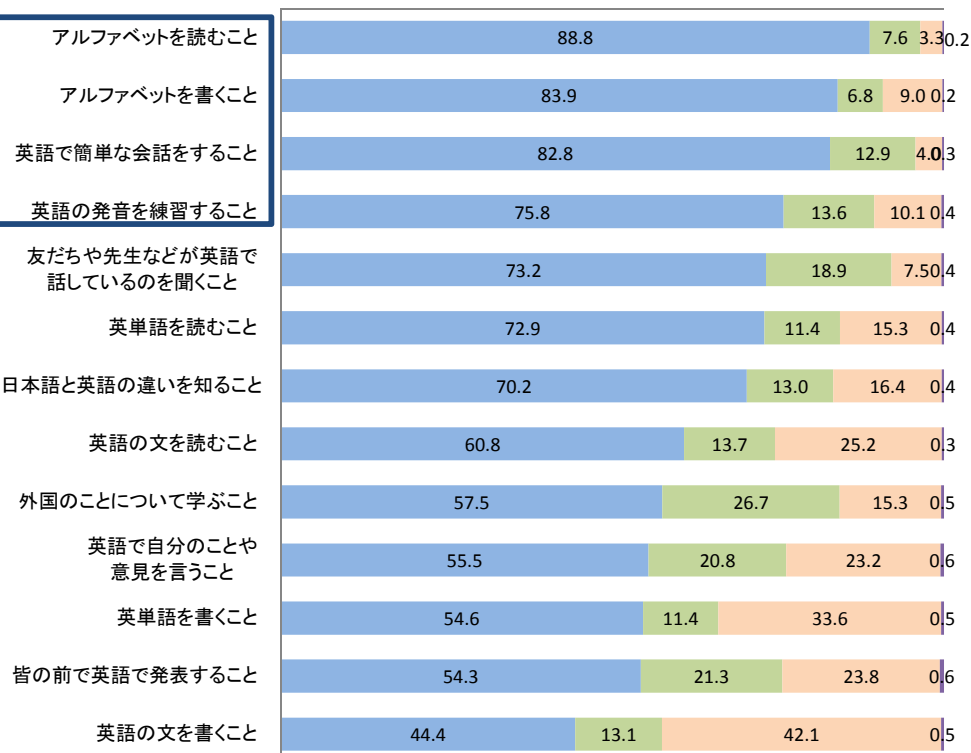
- 「小学校の外国語活動でもっと学習しておきたかったこと」として、  
 生徒の83.7%が「英単語を書くこと」(81.7%)、  
 80.9%が「英語の文を書くこと」(78.6%)、  
 80.1%が「英単語を読むこと」(77.9%)、  
 79.8%が「英語の文を読むこと」(77.6%)、  
 と回答。

( )内は、24年度調査結果

Q. 小学校の英語の授業で学んだことの中で、中学校の英語の授業で役に立ったことはありますか。(単数回答)

■役に立った ■役に立たなかった ■小学校でやっていないと思う ■無回答

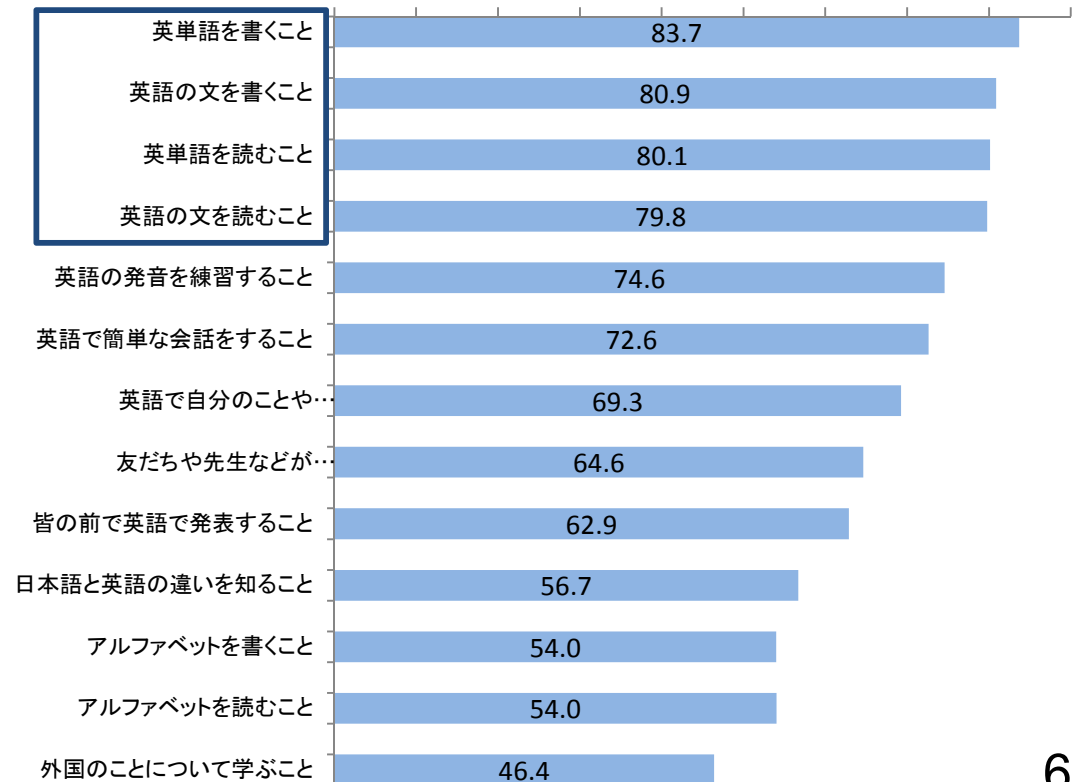
0% 20% 40% 60% 80% 100%



Q. 以下の項目は、小学校の外国語活動でもっと学習しておきたかったと思いますか。

※「そう思う」「そう思わない」「無回答」のうち、「そう思う」と回答した割合

0 10 20 30 40 50 60 70 80 90



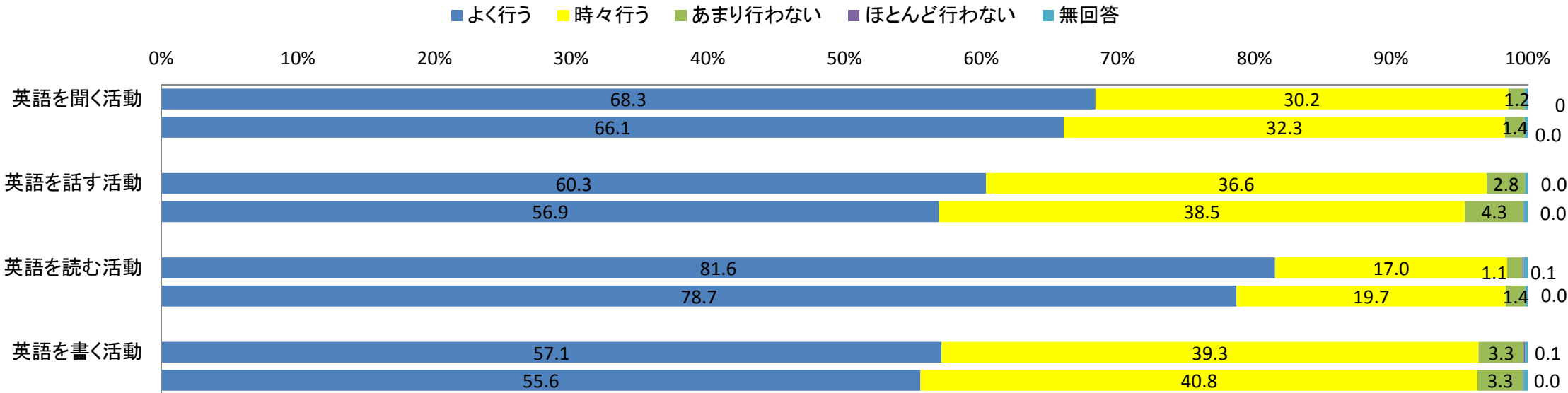
# 中学校外国語科担当教員の外国語科指導状況

## 授業における言語活動の指導①

- 「聞く活動」66.1%（68.3%）、「読む」78.7%（81.6%）に比べ、「書く活動」55.6%（57.1%）、「話す活動」56.9%（60.3%）の割合がやや低くなっている。

（ ）内は、前回調査結果

Q. あなたの英語の授業において、1つの単元の中でそれぞれの活動をどの程度行っていますか。（単数回答）

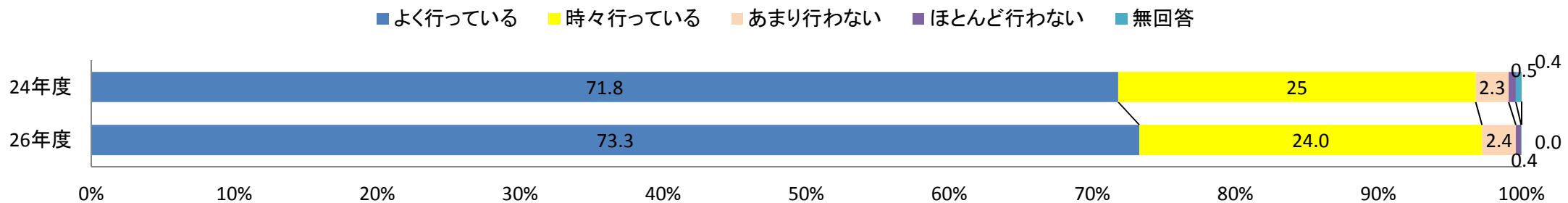


上段：H24年度調査 下段：H26年度調査

## ペアワーク・グループワークの実施状況

- 97.3%（96.8%）の教員がペアワークやグループワーク「よく行っている、時々行っている」と回答。

Q. あなたの英語の授業において、生徒にペアワークやグループワークをどの程度させていますか。（単数回答）

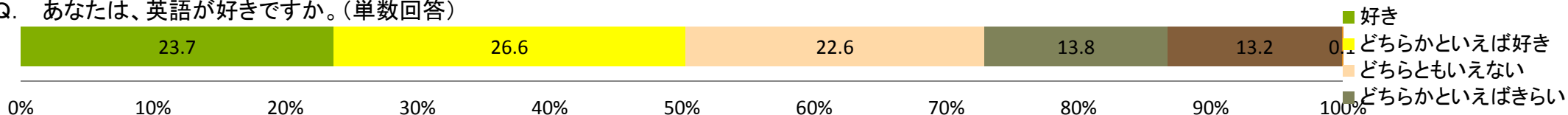


## 中学校2年生の外国語科に対する意識

### 英語に対する意識（中2）

○ 生徒の50.3%が「英語が好き、どちらかといえば好き」と回答。

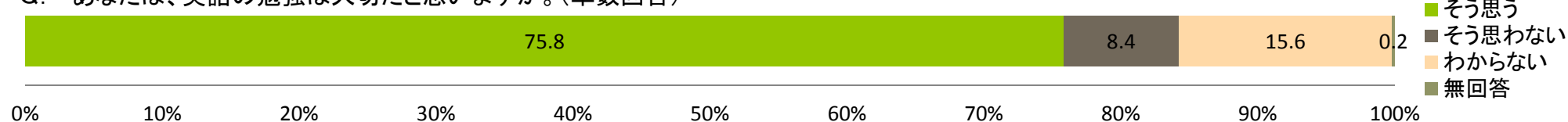
Q. あなたは、英語が好きですか。（単数回答）



### 英語の勉強に対する意識（中2）

○ 生徒の75.8%が「英語の勉強は大切だと思う」と回答。

Q. あなたは、英語の勉強は大切だと思いますか。（単数回答）

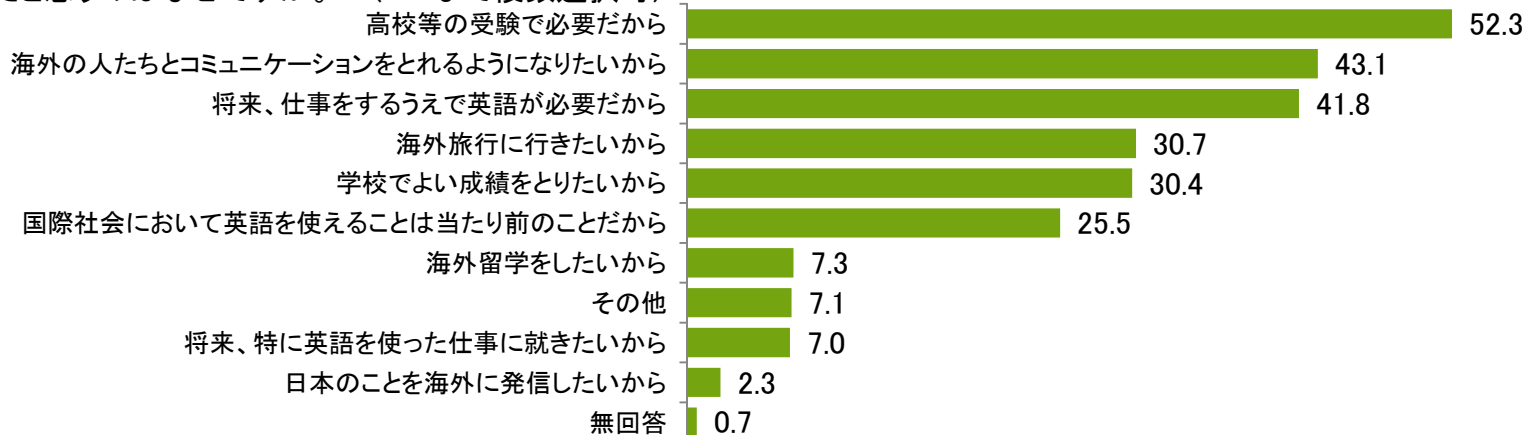


### 将来の英語使用に対する意識①（中2）

○ 英語の勉強が大切だと思う理由として、生徒の

- ・ 52.3%が「高校等の受験で必要だから」
- ・ 43.1%が「海外の人たちとコミュニケーションをとれるようになりたいから」
- ・ 41.8%が「将来、仕事をするうえで英語が必要だから」と回答。

Q. 英語の勉強が大切だと思うのはなぜですか。（3つまで複数選択可）



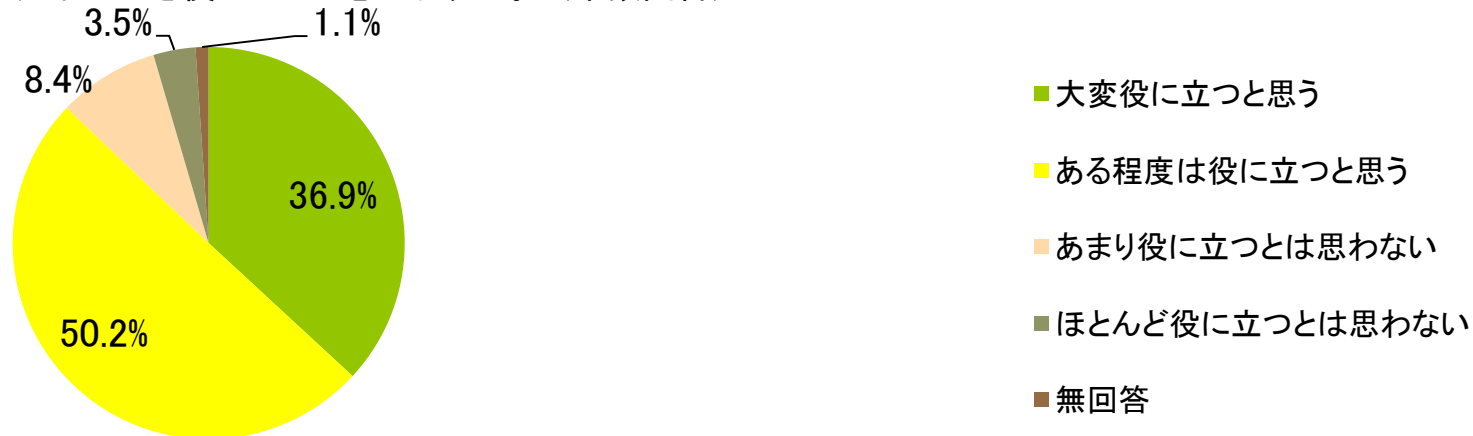


## 中学校2年生の外国語科に対する意識

### 将来の英語使用に対する意識② (中2)

○ 生徒の87.1%が、授業で学習したことは将来社会に出たときに「大変役に立つと思う、ある程度は役に立つと思う」と回答。

Q. 授業で学習したことは、将来社会に出たとき役に立つと思いますか。(単数回答)



### 将来の英語使用に対する意識③ (中2)

- 生徒の42.0%が将来英語を使って「ぜひ働いてみたい、機会があれば働いてみたいと思う」と回答。
- 一方、「あまり働いてみたいとは思わない、全く働いてみたいとは思わない」と回答した生徒の割合は57.1%。

Q. 将来、英語を使って海外で働いてみたいと思いますか。(単数回答)



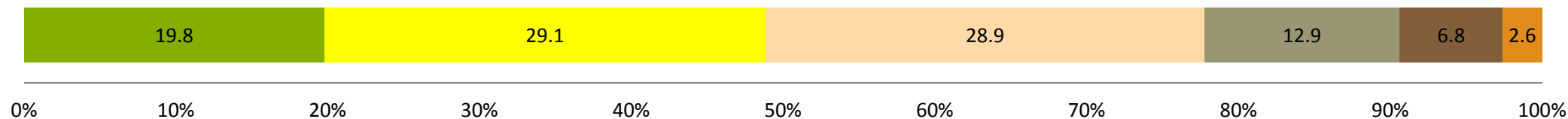
# 中学校2年生の外国語科に対する意識

## 授業の理解についての状況①（中2）

- 生徒の
  - ・48.9%が「英語の授業内容を理解している、どちらかといえば理解している」
  - ・28.9%が「半分くらい理解している」
  - ・19.7%が「授業内容を理解していない、どちらかといえば理解していない」と回答。

Q. 英語の授業の内容を理解していると思いますか。(単数回答)

■ 理解している ■ どちらかといえば理解している ■ 半分くらい理解している ■ どちらかといえば理解していない ■ 理解していない ■ 無回答

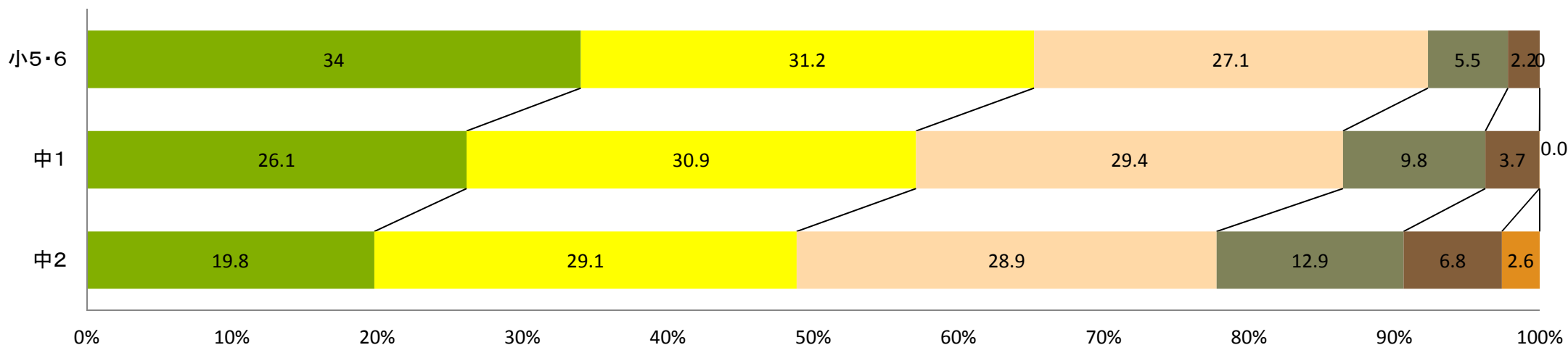


## 授業の理解についての状況②（小5・6、中1、中2）

- 「英語の授業を理解していると思うか」という問いに対し、小学生5, 6年生の65.2%、中学1年生の57.0%、中学2年生の48.9%が「理解している、どちらかといえば理解している」と回答。

Q. 英語の授業の内容を理解していると思いますか。(再掲)

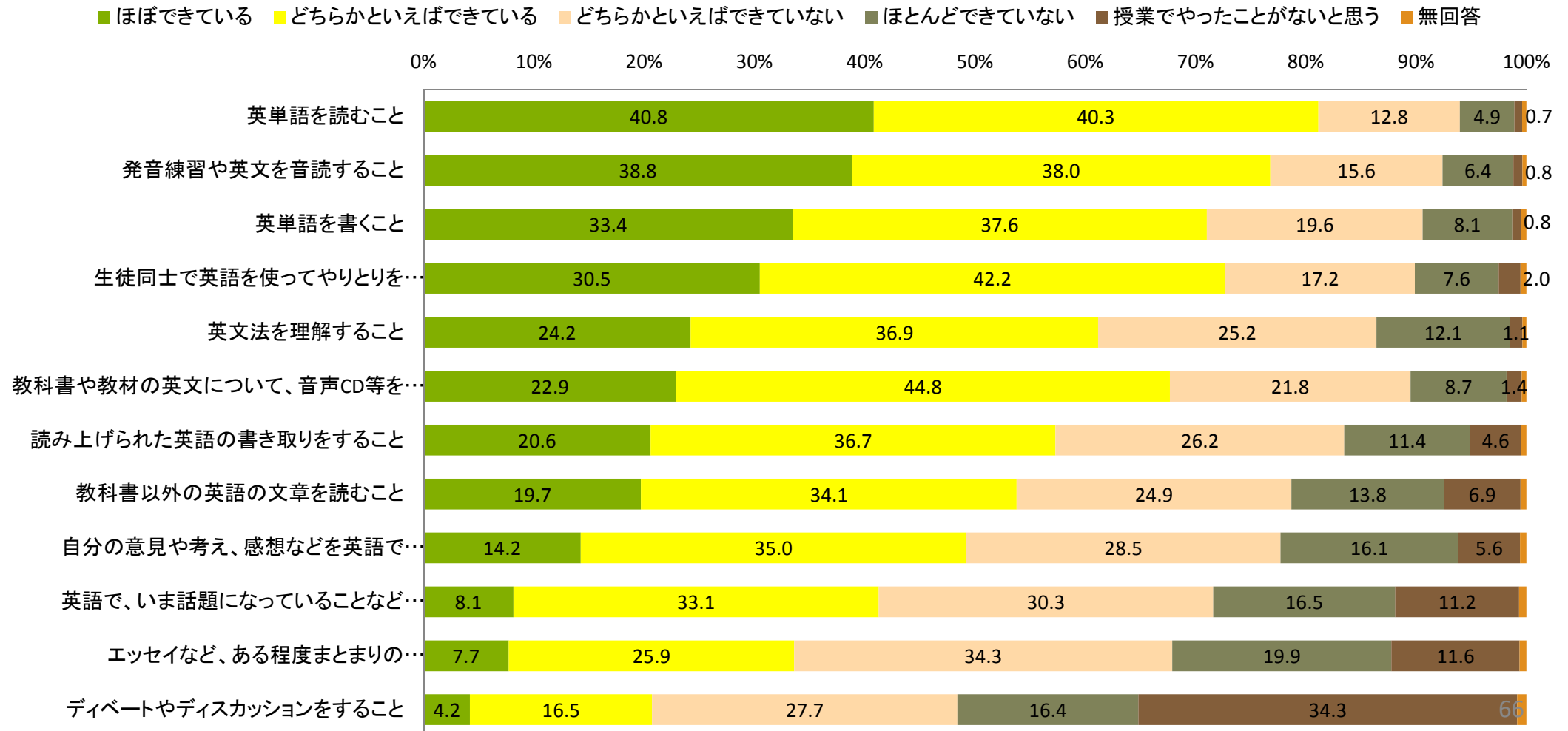
■ 理解している ■ どちらかといえば理解している ■ 半分くらい理解している ■ どちらかといえば理解していない ■ 理解していない ■ 無回答



## 英語の授業での取組状況（中2）

- 授業でどの程度できていると思うかについて、生徒の
  - ・ 81.1%が「英単語を読むことがほぼできている、どちらかといえばできている」
  - ・ 76.8%が「発音練習や英文を音読することがほぼできている、どちらかといえばできている」
  - ・ 33.6%が「エッセイなど、ある程度まとまりのある文章を書くことがほぼできている、どちらかといえばできている」
  - ・ 20.7%が「ディベートやディスカッションをすることがほぼできている、どちらかといえばできている」と回答。

Q. 英語の授業の中で、次の項目についてどの程度できていると思いますか。（単数回答）

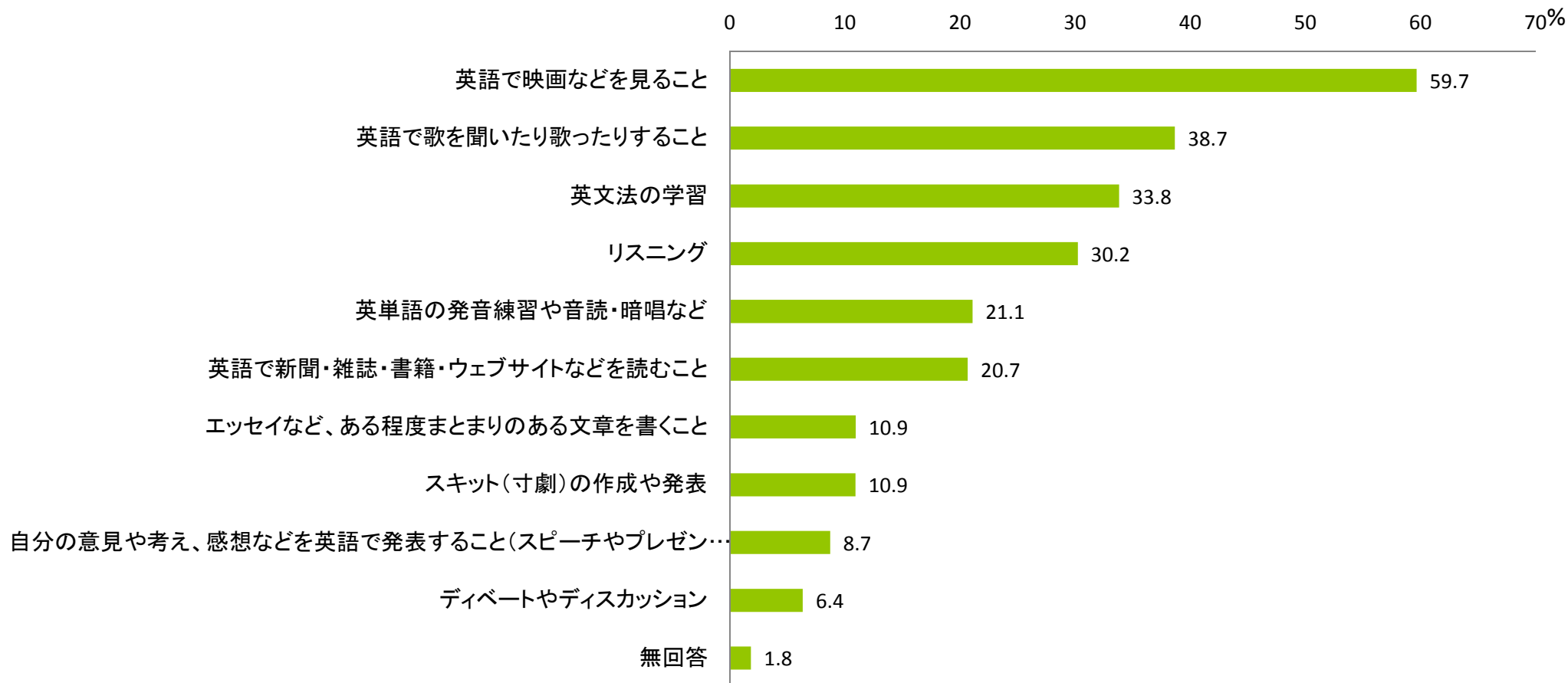


## 中学校2年生の外国語科に対する意識

### 英語の授業でもっとしてみたいこと（中2）

- 英語の授業の中で、生徒の
  - ・ 59.7%が「英語で映画などを見ること」
  - ・ 38.7%が「英語で歌を聴いたり歌ったりすること」
  - ・ 33.8%が「英文法の学習」
  - ・ 30.2%が「リスニング」をもっとしてみたいと回答。
- 生徒の8.7%が「自分の意見や考え、感想などを英語で発表すること（スピーチやプレゼンテーション）」と回答。6.4%が「ディベートやディスカッション」について、「もっとしてみたい」と回答。

Q. 英語の授業の中で、どのようなことをもっとしてみたいと思いますか。（3つまで複数回答可）



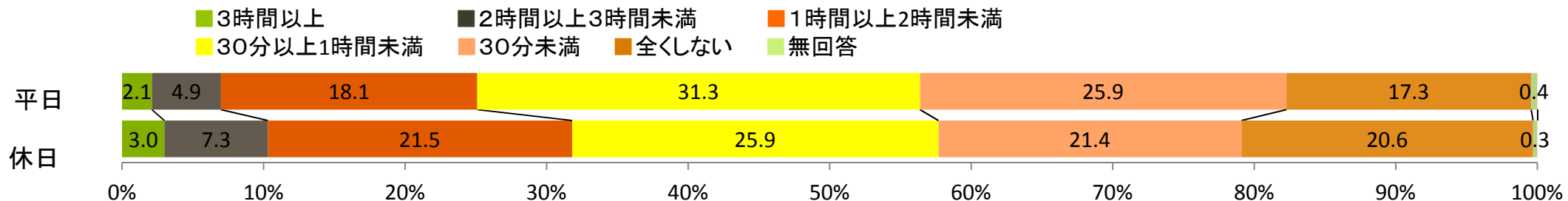
「平成26年度 小学校外国語活動実施状況調査結果」

# 中学校2年生の外国語科に対する意識

## 予習・復習の状況（中2）

○ 生徒が平日、1日あたり予習復習を行う時間の平均の割合は、「30分以上1時間未満」が31.3%と割合が高い。

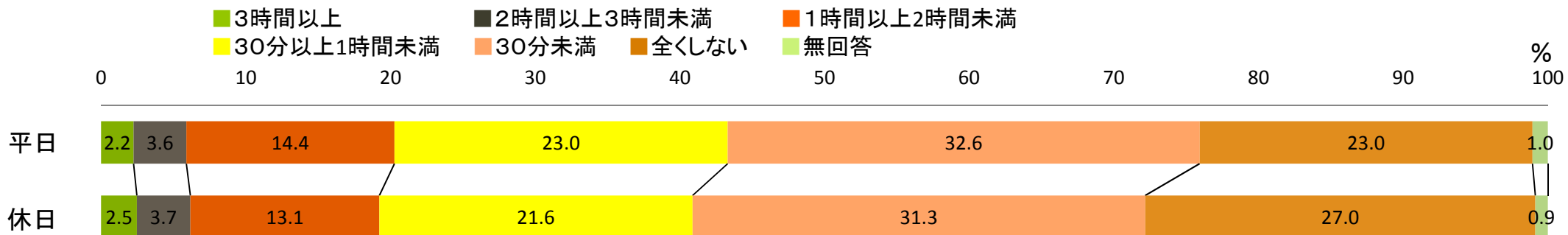
Q. 学校の授業の予習・復習を1日あたりどのくらい行っていますか。（単数回答）



## 英語に触れる状況（中2）

○ 学校の授業の予習・復習以外に英語に触れている生徒の割合は平日で75.8%、休日で72.2%。

Q. 学校の授業の予習・復習以外に1日あたりどのくらい英語に触れていますか。（単数回答）

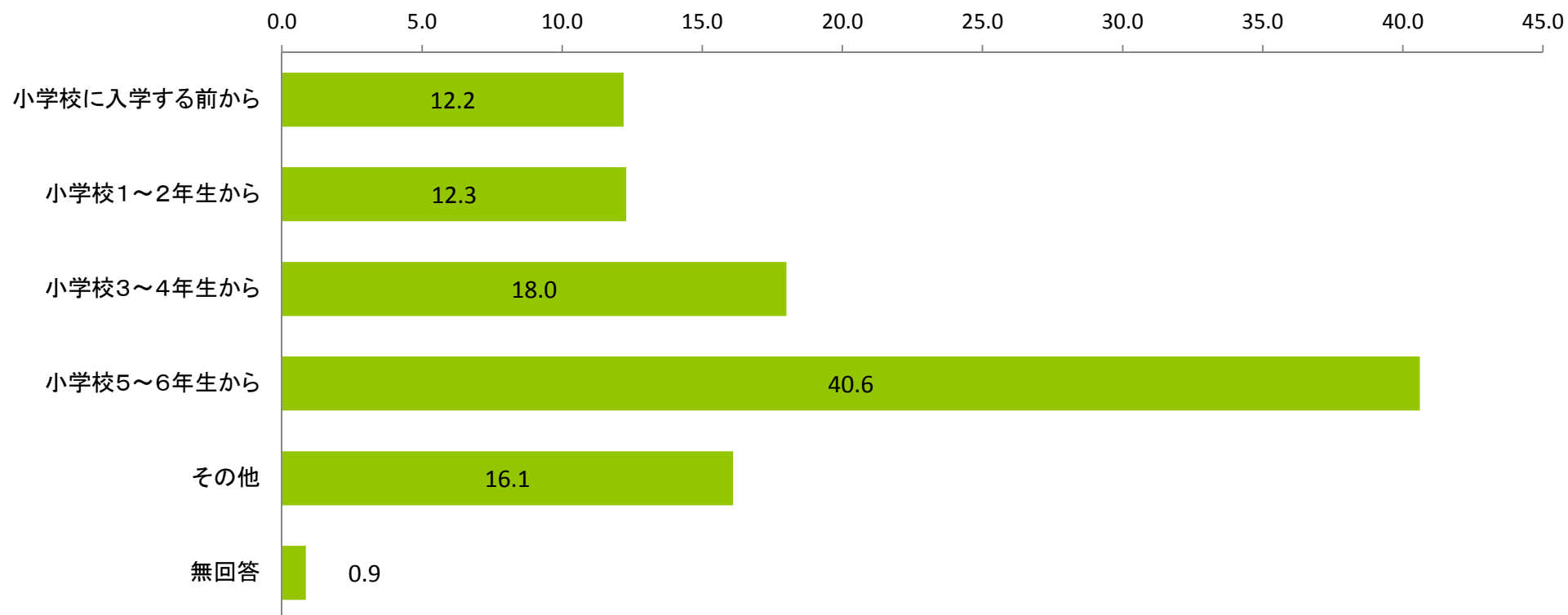


## 中学校2年生の英語に対する取組状況

### 英語を学び始めた時期（中2）

- 英語を学び始めた時期について、生徒の
  - ・ 12.2%が「小学校に入学する前から」
  - ・ 12.3%が「小学校1～2年生から」
  - ・ 18.0%が「小学校3～4年生から」
  - ・ 40.6%が「小学校5～6年生から」と回答。

Q. 英語を学び始めたのはいつですか。（単数回答）



# (参考) 児童生徒の英語学習に関する状況

## ○ 児童生徒が学校の授業や英会話教室で英語を学び始めた時期

(平成25年度 全国学力・学習状況調査 児童生徒質問紙調査)

学校種	小学校入学前	小1・小2	小3・小4	小5・小6	中1以降
小学校	17.9%	23.9%	25.0%	32.8%	—
中学校	11.2%	11.8%	18.6%	38.4%	19.8%

## ○ 英語の学習が好きと回答している児童生徒

(平成25年度 全国学力・学習状況調査 児童生徒質問紙調査)

小学校第6学年	中学校第3学年
約76%	約53%

## ○ 将来、外国へ留学したり国際的な仕事に就いたりしてみたいと思うと回答している児童生徒

(平成25年度 全国学力・学習状況調査 児童生徒質問紙調査)

小学校第6学年	中学校第3学年
約39%	約31%

# 外国語科担当教員の中学1年生に対する意識

## 外国語活動を経験した中学1年の生徒の変容②

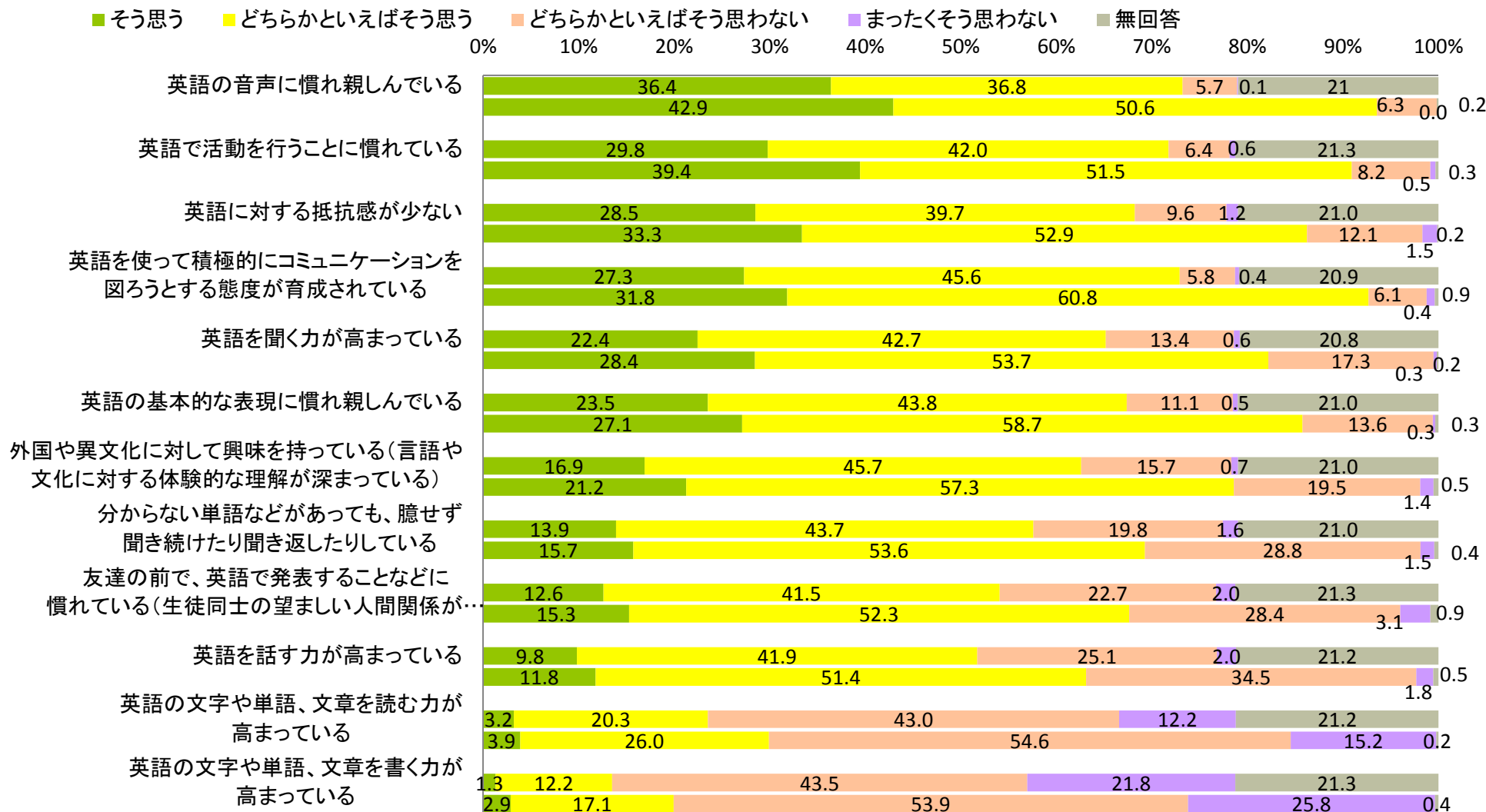
- 小学校で外国語活動を経験したことにより、「英語の音声に慣れ親しんでいる」93.5% (73.2%)、「英語で積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度が育成されている」92.6% (72.9%) などの成果や変容が見られる。

※上記の%数値は「そう思う」「どちらかといえばそう思う」の合計

( )内は、前回調査結果

Q. 具体的にどのような成果や変容がみられましたか。(単数回答)

上段:H24年度調査 下段:H26年度調査





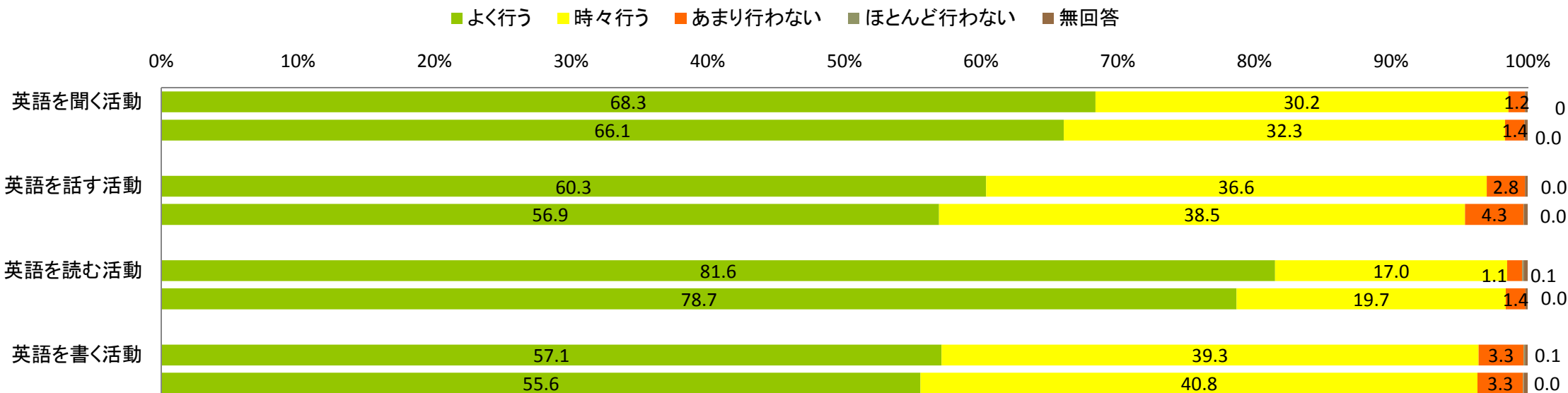
# 中学校外国語科担当教員の外国語科指導状況

## 授業における言語活動の指導①

○ 「聞く活動」66.1%（68.3%）、「読む」78.7%（81.6%）に比べ、「書く活動」55.6%（57.1%）、「話す活動」56.9%（60.3%）の割合がやや低くなっている。

（ ）内は、前回調査結果

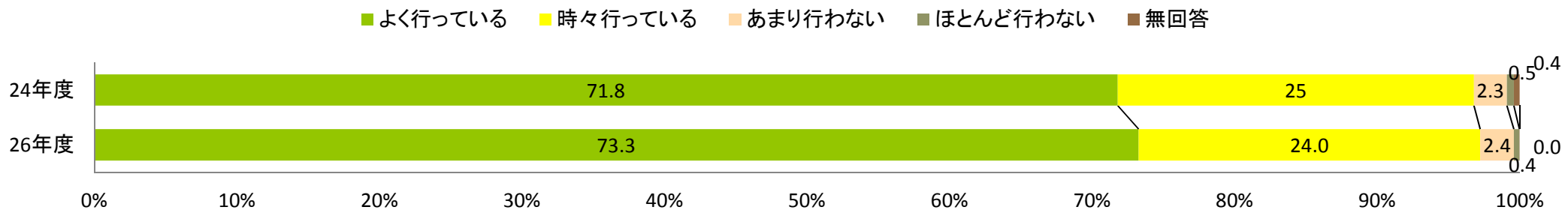
Q. あなたの英語の授業において、1つの単元の中でそれぞれの活動をどの程度行っていますか。（単数回答）



## ペアワーク・グループワークの実施状況

○ 97.3%（96.8%）の教員がペアワークやグループワーク「よく行っている、時々行っている」と回答。

Q. あなたの英語の授業において、生徒にペアワークやグループワークをどの程度させていますか。（単数回答）



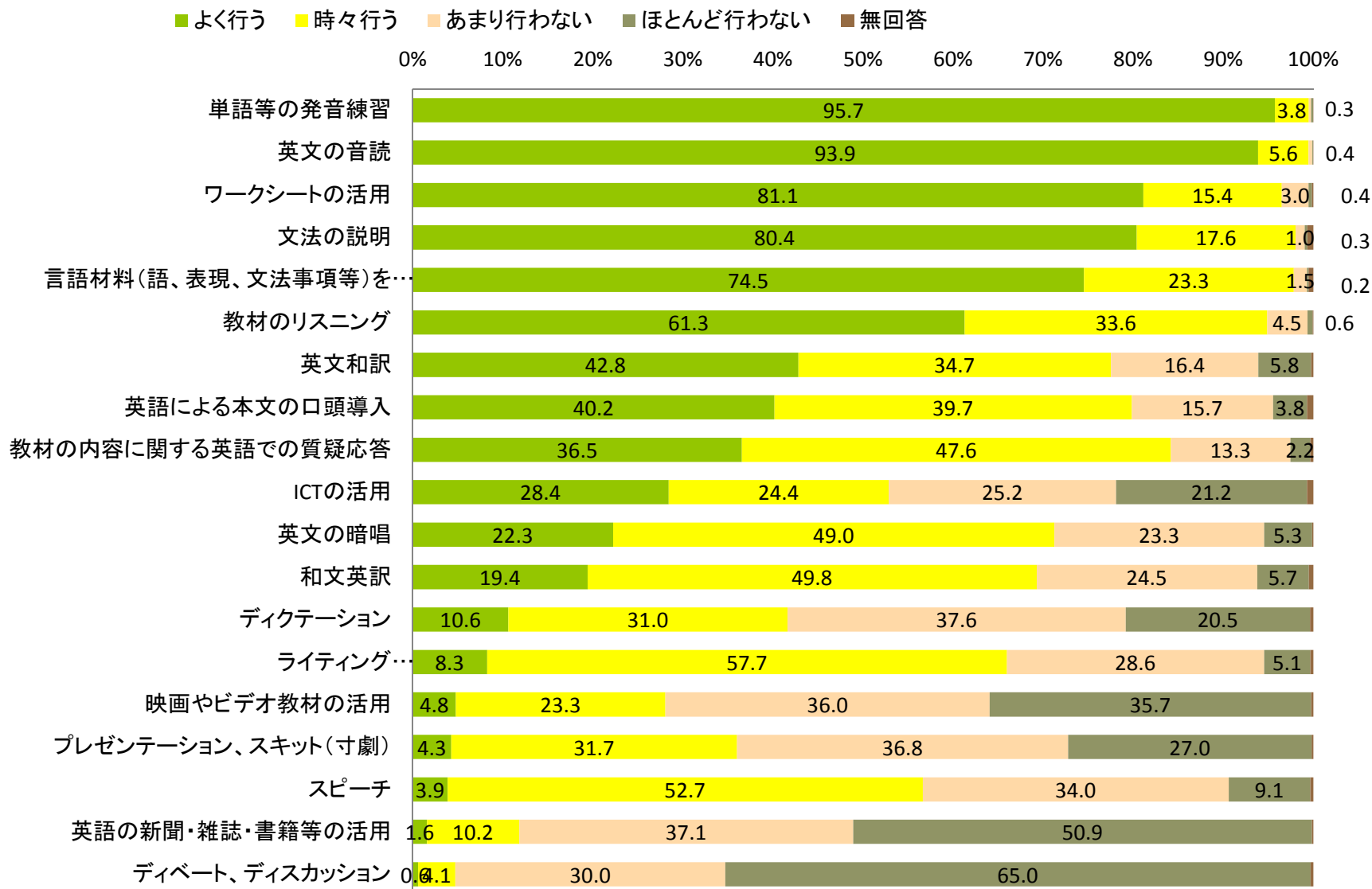
## 中学校外国語科担当教員の外国語科指導状況

### 授業における言語活動の指導②

- 「文法の説明」98%や「言語材料を活用できるようにするための練習」97.8%に比べ、それをさらに活用して行う「スピーチ」56.6%、「プレゼンテーションやスキット（寸劇）」36.0%、「ディベート、ディスカッション」34.7%の割合は低い。

※上記の%数値は「よく行う」「時々行う」の合計

Q. あなたの英語の授業において、次のようなことをどのくらい行いますか。（単数回答）

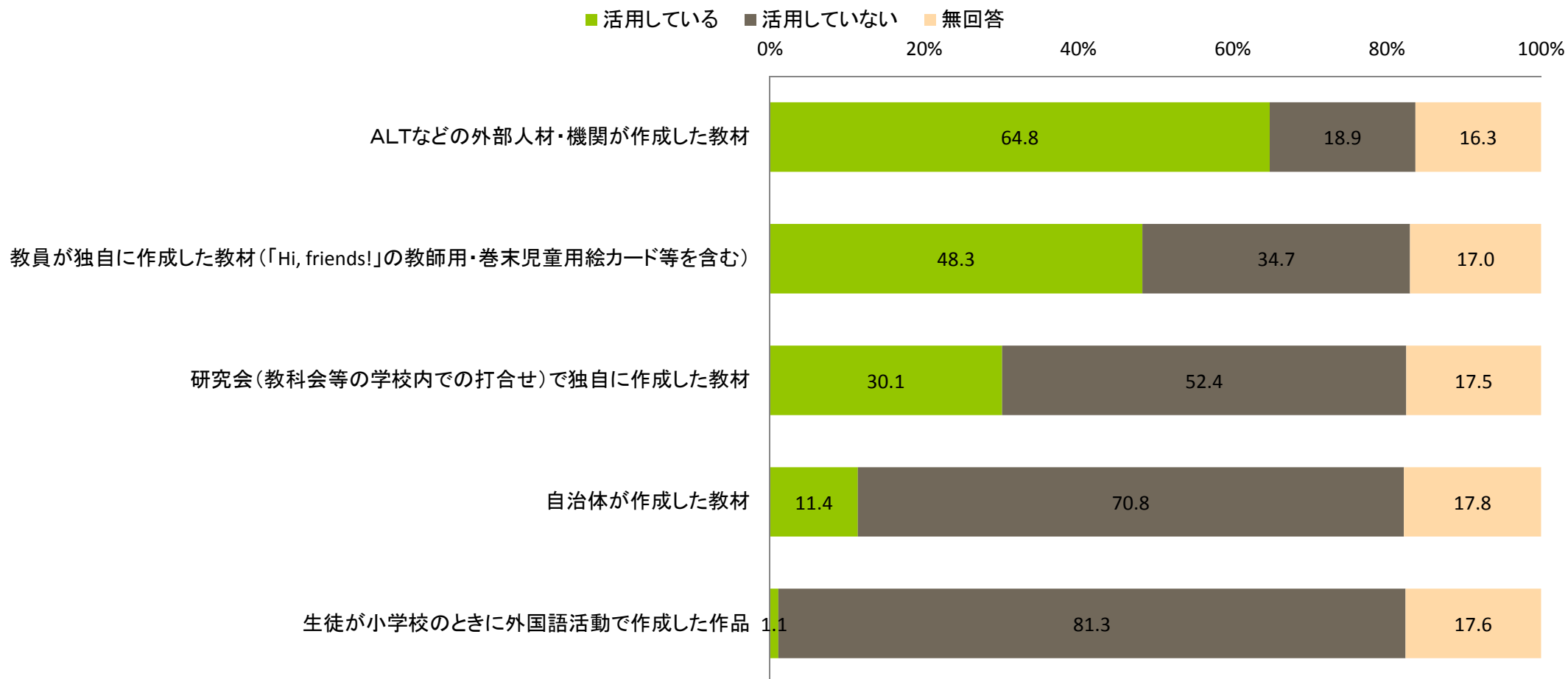


## 中学校外国語科担当教員の外国語科指導状況

### 活用している教材の状況

- 英語の授業で活用している教材について、教員の
  - ・ 64.8%が「ALTなどの外部人材・機関が作成した教材」
  - ・ 48.3%が「教員が独自に作成した教材（「Hi, friends!」の教師用・巻末児童用絵カード等を含む）」
  - ・ 30.1%が「研究会（教科会等の学校内での打合せ）で独自に作成した教材」を活用していると回答。

Q. 外国語活動を踏まえ、あなたが英語の授業で活用している教材について、それぞれあてはまるものを選択してください。（単数回答）

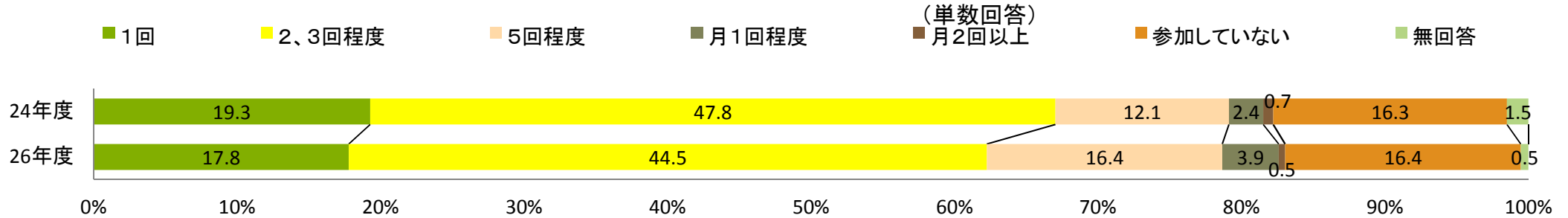


# 外国語科担当教員の研修等に対する意識

## 学校外での研修

- 教員の83.1% (82.3%) が学校外での研修に参加している。
  - 参加回数について、44.5% (47.8%) は年度内に2、3回程度と回答。
- ( )内は、前回調査結果

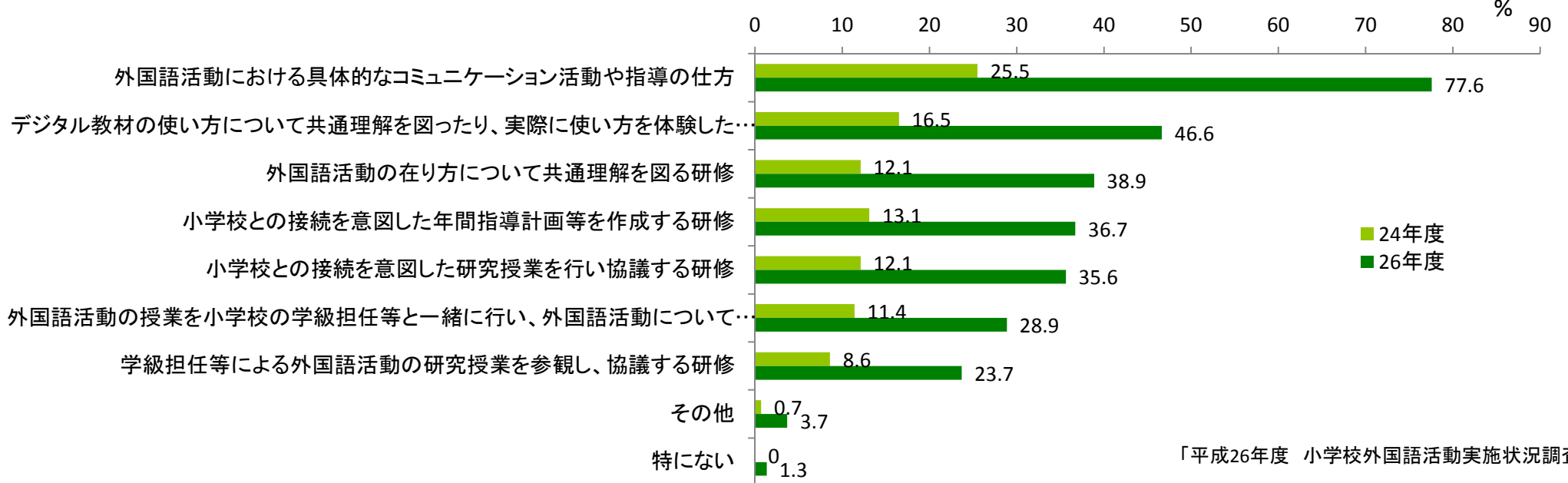
Q. あなたは今年度中にどの程度外国語活動を踏まえた指導に関する学校外での研修に参加しましたか。



## 必要だと感じる研修

- 教員の77.6% (25.5%) が「外国語活動における具体的なコミュニケーション活動や指導の仕方に関する研修」が必要と回答。
- ( )内は、前回調査結果

Q. あなたが必要だと感じる研修について、あてはまるものをすべて選んで下さい。(複数回答可)



# 外部試験団体と連携した英語力調査事業

平成28年度予算額 62,609千円(116,325千円)

## 英語教育の在り方に関する有識者会議報告(H26. 9. 26)

生徒の英語力を把握し、きめの細かな指導の改善・充実や生徒の学習意欲の向上につなげるため、「第2期教育振興基本計画」(平成25年6月14日閣議決定)において掲げられている英語力の目標(学習指導要領に沿って設定される目標(中学校卒業段階:英検3級程度以上、高等学校卒業段階:英検準2級程度から2級程度以上)を達成した中・高生の割合50%)から、高等学校段階の生徒の特性・進路等に応じた英語力、例えば、高等学校卒業段階で、英検2から準1級、TOEFL iBT60点程度等以上を設定し、生徒の英語力の把握・分析・改善を行うことが必要。

## 生徒の英語力向上推進プラン(H27. 6. 5)

- ①生徒の英語力に係る国の目標を踏まえた都道府県ごとの目標設定・公表を要請
- ②「英語教育実施状況調査」に基づく都道府県別の生徒の英語力の結果の公表
- ③義務教育段階の中学校については、英語4技能を測定する「全国的な学力調査」を国が新たに実施することで英語力を把握
- ④中・高・大学での英語力評価及び入学者選抜における英語の4技能を測定する民間の資格・検定試験の活用を引き続き促進。

### ●H26より高等学校第3学年、H27より中学校第3学年を対象に生徒の英語力を把握し、その結果を分析・検証

\*平成27年度は高等学校第3学年約9万人、中学校第3学年約6万人を対象に実施。

### ●「第2期教育振興基本計画」の成果指標である英語力を4技能(聞くこと、話すこと、読むこと、書くこと)にわたって測定するフイージビリティ調査

### ●生徒の英語力や学習状況について把握・分析を行い、それらの結果を指導改善に活用

### ●平成28年度は、中学校第3学年を対象に調査を実施

(経年比較を含めた分析を実施)

### ●「生徒の英語力向上推進プラン」(H27.6文部科学省発表)を受け、中学校については、英語の4技能を測定する「全国的な学力調査」の導入\*等に向けた検討において活用

\*平成31年度を目途に文部科学省「全国的な学力調査に関する専門家会議」英語ワーキンググループにおいて検討

### (参考)今後の実施イメージ

#### <高等学校第3学年の調査>

①「教育振興基本計画」のPDCAサイクルにおけるCheck機能、②教育委員会等における指導改善の活用に資するものとして、調査時期については計画達成状況の把握に必要な時期に実施。

※平成28年度は実施しない。

(実施パターン例:「教育振興基本計画」の期間中、期首・中間・期末 など)

#### <中学校第3学年の調査>

平成28年度調査を実施。

(その後の予定(イメージ):「全国的な学力調査」の詳細設計(H29~)、予備調査実施(H30~))

### 【指導改善における活用のイメージ】

<Plan> 学校における指導等の計画

<Do> 指導(授業内外の取組)

<Check>

英語の資格・検定試験実施団体、  
研究機関と連携した英語力調査

質問紙  
調査  
(学習状況等)

効果的な指導の検証・課題の抽出

<Action> 指導改善の取組

生徒全体の英語力の傾向

- 「読むこと」「聞くこと」は、CEFR（ヨーロッパ言語共通参照枠）A1上位からA2下位レベルに集中。
- 「書くこと」の得点者は全体の約70%（無回答：29.2%）、「話すこと」の得点者は全体の約85%（無回答：13.3%）となっており、課題が大きい。

【国公立全体のスコア分布】

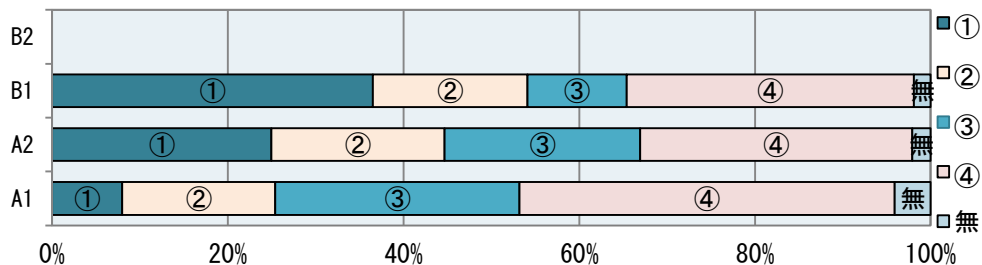
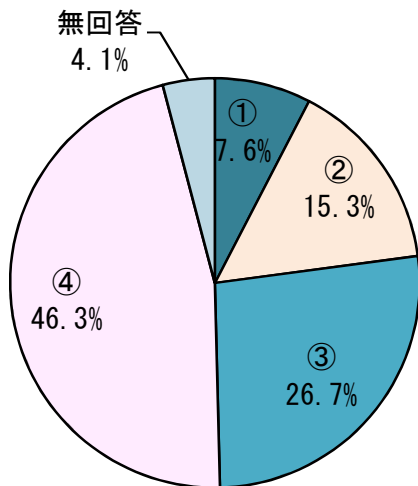
<読むこと> 43問 (約45分)				<聞くこと> 36問 (約25分)				<書くこと> 2問 (約25分)				<話すこと> 3問 (対面約10分)																																		
CEFR	得点	Reading	割合	CEFR	得点	Listening	割合	CEFR	得点	Writing	割合	CEFR	得点	Speaking	割合																															
B2	320	77	0.2%	B2	320	175	0.3%	B2	140	2	0.0%	B1	14	274	1.7%																															
	310	18		B1	310	50	2.0%		B1	135			0	A2		13	272																													
	300	27			B1	300				70			A2			12	415																													
290	37	B1	290			68		A2		11	501																																			
280	69		B1	280		109	A2		10	657																																				
270	82			B1	270	126			A2	9	691																																			
260	107	B1			260	160		A2		8	770																																			
250	157		B1		250	227	A2			7	946																																			
240	195			B1	240	256			A2	6	1185																																			
230	317	B1			230	341		A2		5	1632																																			
220	420		B1		220	454	A2			4	1105																																			
A2	210			561	25.1%	A2			210	615	21.8%	A2	100	578	12.8%	A1	9	691	87.2%																											
	200	778		A2				200	748	A2			95	608																																
	190	1124	A2				190	992	A2				90	1,183																																
	180	1477					A2	180					1241	A2			85	946																												
	170	1956						A2					170				1731	A2		80	1,804																									
	160	2610											A2				160			2199	A2	75	1,736																							
	150	3545															A2			150		2996	A2	70	1,971																					
	140	5245																		A2		140		4034	A2	65	1,816																			
A1	130	8192			72.7%	A1					130	5438			75.9%	A1			60			2,347		86.5%		6	1185																			
	120	11790		A1						120	7684	A1							60			2,347				A1	5	1632																		
	110	12508	A1						110	8831	A1								55			1,978					A1	4	1105																	
	100	9796					A1		100	9026				A1					50			2,516						A1	3	1648																
	90	4698						A1	90	7840								A1	45			2,111							A1	2	1450															
	80	1823							A1	80			5782						A1		40	2,417								A1	1	2827														
	70	604								A1			70				3474				A1	35	1,988								A1	0	2210													
	60	208											A1				60			2125		A1	30		2,497							A1	平均	4.5												
	50	76															A1			50			920		A1								25	2,080	A1	調査対象	16,583									
	40	51																		A1			40										396	A1		20	2,258	A1	0点	2,210						
	30	19																					A1										30			189	A1		15	2,167	A1	割合	13.3%			
	20	2																															A1			20			106	A1		10	2,562	A1	平均	27.2
	10	0																																		A1			10			99	A1		5	2,913
0	285	A1			0	352									A1	0								30,089															A1			0点			20,139	
平均	129.4			A1	平均	120.3						A1				平均								27.2		A1																割合			29.2%	
調査対象	68,854		A1		調査対象	68,854					A1					調査対象								69,052			A1																			

## 4 技能を通じた言語活動に対する意識

- 英語でスピーチやプレゼンテーションをした経験が少ない。
- 「話すこと」の試験結果が高いほど、授業において「英語でスピーチやプレゼンテーションをしていたと思う」生徒の比率が高い（公立）

問 第2学年での英語の授業では、英語でスピーチやプレゼンテーションをしていたと思いますか。

- ① そう思う    ② どちらかといえば、そう思う  
③ どちらかといえば、そう思わない    ④ そう思わない

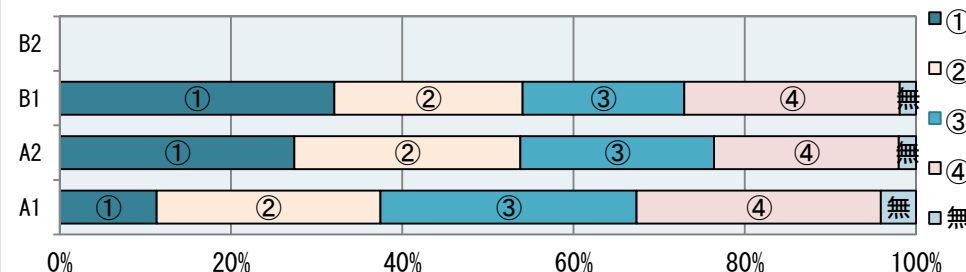
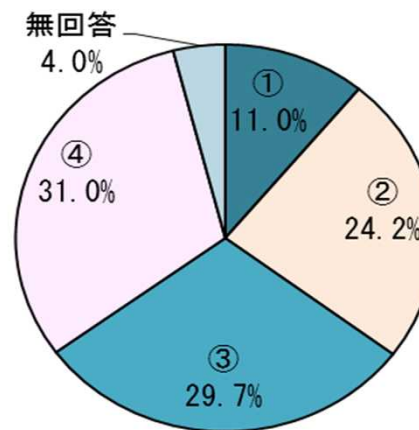


※「書くこと」の試験結果とのクロス。

- 聞いたり読んだりしたことについて、英語で話し合ったり意見交換をした経験が少ない。
- 「話すこと」の試験結果が高いほど、「生徒同士で英語で話し合ったり意見の交換をしていると思う」生徒の比率が高い（公立）

問 第2学年での英語の授業では、聞いたり読んだりしたことについて、生徒同士で英語で話し合ったり意見の交換をしたりしていたと思いますか。

- ① そう思う    ② どちらかといえば、そう思う  
③ どちらかといえば、そう思わない    ④ そう思わない



※「話すこと」の試験結果とのクロス。

# 学校の取組紹介：CAN-DO リストに基づいた4技能統合型の授業を推進

## 1 学校プロフィール(※学級数及び生徒数は平成27年2月調査日時点)

学級数・生徒数	15 学級(548 人) / 第3学年…5学級(196 人)
ALT活用状況	ALTは1人で、週4日勤務。授業は第1・2学年の全クラスでそれぞれ週1回担当
備考	・生徒の学習意欲向上を重視した学習到達目標(CAN-DOリスト)の設定・評価の工夫

## 2 テスト結果、質問紙における学校の特徴⇒4技能の言語活動の割合が高く、ライティング、スピーキング力は全国平均の2倍以上

	Reading	Listening	Writing	Speaking
当該高等学校の平均点	137.2	134.6	54.8	8.8
全国平均点(公立学校)	126.7 / 320	117.1 / 320	24.9 / 144	4.2 / 14

## 3 生徒質問紙結果 ⇒ 「聞く、読む」→「話す、書く」の統合型の言語活動が多い。

- ◆「聞いたり読んだりしたことについて、生徒同士で英語で話し合ったり意見の交換をしたりする活動」**79.3%**(全国では**35.2%**)、「聞いたり読んだりしたことについて、その内容を英語で書いてまとめたり自分の考えを英語で書いたりする活動」**78.2%**(全国平均**38.7%**)はいずれも高い割合で実施。

## 4 特色ある授業内の取組

### ①学習到達目標－CAN-DOリストに基づいた授業設計で、教員間及び教員・生徒同士で目標を共有

CAN-DOリストにより、教員間で指導・評価の方向を共有するとともに、生徒は自分が何ができるようになったのかや課題は何であるのかを可視化、教員間で指導・評価の方向を共有。

### ②毎時間ペア・ワークを行い、実際の場面で使えるスピーキング力を育成

授業ではほぼ毎時間、ウォームアップとして、既習の文法事項を活用したペア・ワークを行っている。文法事項を単に暗記させるのではなく、実際のコミュニケーションの中で当該文法事項を使うことを大切にしている。

### ③書いた文章を生徒相互で読み合うことによる読み手を意識したライティング活動

ライティングでは、授業の2回に1回は、「登場人物にEメールを書く」などまとまりのある文章を書く。完成した文章はペアやグループで相互に読み合うことで、読み手が理解しやすいように文章を書くことを心がけている。また、スピーキングテストと同時にエッセイテストなどにおいてライティングの評価を行い、地域の英作文コンテストに向けた校内予選を兼ねている。

### 特色ある授業外の取組

#### 英字新聞の発行、スピーチコンテスト等への積極的な出場

英字新聞発行のため生徒が記者として記事を書いたり、生徒の寄稿を受け付け2、3か月に1回発行し、生徒全員に配付。また、英作文コンテストやスピーチコンテスト、自治体や企業が主催する短期海外研修プログラムにも、多くの生徒が参加を希望。



(「すごろくゲーム」形式でリテリング(再話))



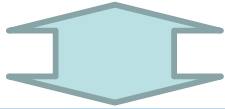
(1対1の「お見合い回転ずし」の体形でスピーチ)



# 秋の事業レビューにおける指摘について(英語教育)

## レビューでの指摘

中・高校生の学力到達度合、教員の英語力は非常に低い。教員研修を漫然と実施するだけでなく、中高の教員の配置見直しやICT等の外部教材の活用など、費用対効果を考えつつ検証すべき。



## 文部科学省としての対応

- 「第2期教育振興基本計画」(H25年6月閣議決定:H25~29年度)の目標設定の下、文部科学省「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」を公表(H25年12月)  
⇒ 平成26年度より事業開始、PDCAサイクルの徹底



- 「生徒の英語力向上推進プラン」(H26. 6公表)
  - ・ 中学3年生を対象とした英語4技能を測定する「全国的な学力調査」実施(平成31年度を目途)に向けた検討を今年8月より開始
  - ・ 各都道府県で「英語教育改善プラン」の策定・実行によるPDCAサイクル構築
    - ①平成27年秋:各都道府県の「英語教育改善プラン」の策定を要請(目標設定、管理と研修計画、検証など)
    - ②平成28年春:各都道府県の「英語教育改善プラン」の公表
    - ③平成28年度中:各都道府県のプランとその効果のモニタリング・国の目標達成状況のモニタリング
    - ④平成29年度中:レビューし、第3期教育振興基本計画の新たな目標設定



文部科学省(小・中・高等学校を通じた英語教育強化事業等)(H26より順次実施)

- ①英語教育強化地域拠点事業(29地域)
- ②小学校英語教科化に向けた新たな補助教材開発・検証
- ③外部専門機関と連携した英語担当教員の指導力向上(「英語教育推進リーダー」養成)
- ④外部試験団体と連携した生徒の4技能英語力調査(中3・高3を対象に実施)
- ⑤教員養成の抜本改善
- ⑥小学校英語教科化に対応した  
中学英語免許状取得支援(H28年度新規要求)
- ⑦教員の採用改善
- ⑧ICT活用による英語教育の推進

第2期教育振興基本計画(H25~29年度)の成果目標

[生徒の英語力]

※中学卒業段階では英検3級程度以上50%  
(H26:35%),

高校卒業段階では英検準2級~2級程度以上  
50%(H26:32%)

[教員の英語力]

※英語教員は英検準1級、TOEFLiBT80点程度  
以上(中学英語教員は50%(H26:29%)、  
高校英語教員は75%以上(H26:55%))

# Check (全体)

➤ 「生徒の英語力」と「教員の英語力・指導力」の把握・県別公表・課題の分析・施策の検証

第2期教育振興基本計画（25～29年度）

第3期教育振興基本計画（30～34年度）

第4期（35年度～）

25年度 (2013) 26年度 (2014) 27年度 (2015) 28年度 (2016) 29年度 (2017)

30年度 (2018) 31年度 (2019) 32年度 (2020) 33年度 (2021) 34年度 (2022)

35～39年度

## ◆ 学習指導要領改訂

◆英語教育の在り方に関する有識者会議報告(26年9月)

中教審において審議  
H28年度中を目処に答申

改訂

新学習指導要領を段階的に先行実施

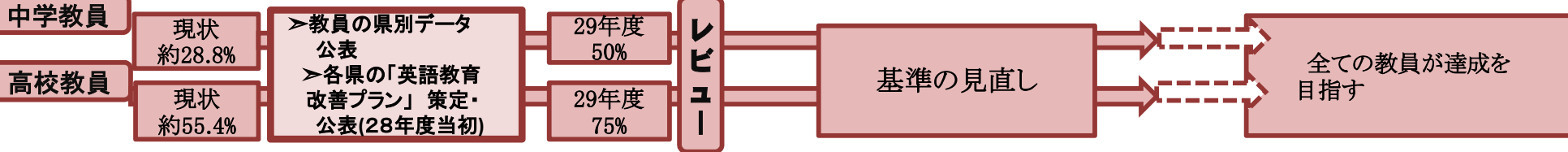
小学校  
全面実施

中学校  
全面実施

高校  
年次進行により実施

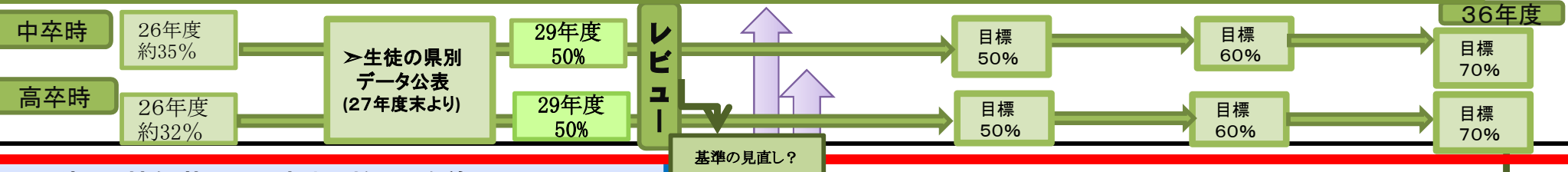
## ◆ 教員の英語力に関する目標設定 [英語教育実施状況調査]

⇒英検準1級程度以上,TOEFLiBT80点以上 (CEFR: B2) を達成した **中学英語教員の割合 50%、高校英語教員の割合 75%**



## ◆ 生徒の英語力に関する目標設定 [英語教育実施状況調査]

⇒中学校卒業段階：英検3級程度以上 (CEFR: A1上位) 高等学校卒業段階：英検準2級程度～2級程度以上 (A2～B1) を達成した **中高校生の割合 50%**



## ◆ 生徒の4技能英語力の把握・検証・改善

中学3年生の英語力調査  
6万人のフィジビリティ調査  
(27～28年度実施)

高校3年生の英語力調査  
7万人のフィジビリティ調査  
(26～27年度実施)

全国的な英語4技能の学力調査

(調査詳細設計) (30年度予備調査)  
(31年度より実施)

※例えば複数年に一度程度での実施を検討

高大接続改革実行プランに基づき高大接続システム改革会議において検討されている  
高等学校基礎学力テスト(仮称)の実施(平成31年度～)等

うち、職業、又は留学等を希望する生徒に必要な英語力の目標設定  
B1～B2以上  
(英検2～準1級程度)  
10%以上

# 目標達成のための具体的なPDCAサイクル

## 国の支援(26年度以降、開始)

### ①『英語教育強化地域拠点事業』

(研究開発課題例)

- ・小・中・高を通じた指標形式の目標設定
- ・小学校英語の早期化・教科化

### ②『外部専門機関と連携した英語指導力向上事業』

- ・生徒の英語力、英語担当教員の英語力・指導力の把握・検証・公表・改善
- ・改善例を公表

①平成27年秋：各県の「英語教育改善プラン」の策定要請の徹底  
同プラン内の教員の英語力・指導力向上の具体的計画策定について強く要請

②平成28年春：各県の「改善プラン」の公表

③平成28年度中：各県のプランとその効果のモニタリング  
国の目標達成状況のモニタリング

④平成29年度中：レビューし、第3期教育振興基本計画の新たな目標設定

## 県における「英語教育改善プラン」策定・公表

課題

[生徒] 4技能、特に「話す」「書く」発信力が弱い  
[教員] 生徒が自分の考えや気持ちなどを英語で伝え合う指導に必要な英語力・指導力が十分でない。

検証



改善



「課題」を踏まえ、次期学習指導要領の準備と課題に係る取組に重点化。

(例)

#### ◆ 英語教師の英語力向上講座

- ・受講後、全員が英検、TOEFL、TOEICなど民間の資格・検定試験を受検

#### ◆ 英語によるスピーチ・ディベート指導者養成講座

- ・指導法、パフォーマンス評価方法、ディベートを通して身につく力(論理的思考力などの育成)、ディベート大会による活動

#### ◆ 外国語指導助手(ALT)の指導力向上研修

## 県教育委員会の目標設定・管理(高校の例)

	H25年	H26年		～	H29年
	現状	目標値	達成値	⇒	目標値
学習到達目標の設定(CAN-DOリスト)	41%	100%	100%	～	100%
教員の授業における英語使用状況	55%	58%	60%	～	80%
教員の英語力	65%	72%	76%	～	95%
生徒の英語力	36%	40%	39.3%	～	50%

平成26年度は、研修受講後、民間の外部試験を受検し、英語力を10%以上向上した事例もあり

## (参考) 外国語の学習・教授・評価のためのヨーロッパ共通参照枠について

- CEFR (Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment) は、語学シラバスやカリキュラムの手引きの作成、学習指導教材の編集、外国語運用能力の評価のために、透明性が高く、分かりやすい、包括的な基盤を提供するものとして、20年以上にわたる研究を経て策定された。欧州域内外で使われている。
- 欧州域内では、国により、CEFRの「共通参照レベル」が、初等教育、中等教育を通じた目標として適用されたり、欧州域内の言語能力に関する調査を実施するにあたって用いられたりするなどしている。

熟練した 言語使用者	<b>C2</b>	聞いたり読んだりした、ほぼ全てのものを容易に理解することができる。いろいろな話し言葉や書き言葉から得た情報をまとめ、根拠も論点も一貫した方法で再構築できる。自然に、流暢かつ正確に自己表現ができる。
	<b>C1</b>	いろいろな種類の高度な内容のかなり長い文章を理解して、含意を把握できる。言葉を探しているという印象を与えずに、流暢に、また自然に自己表現ができる。社会生活を営むため、また学問上や職業上の目的で、言葉を柔軟かつ効果的に用いることができる。複雑な話題について明確で、しっかりとした構成の、詳細な文章を作ることができる。
自立した 言語使用者	<b>B2</b>	自分の専門分野の技術的な議論も含めて、抽象的な話題でも具体的な話題でも、複雑な文章の主要な内容を理解できる。母語話者とはお互いに緊張しないで普通にやり取りができるくらい流暢かつ自然である。幅広い話題について、明確で詳細な文章を作ることができる。
	<b>B1</b>	仕事、学校、娯楽などで普段出会うような身近な話題について、標準的な話し方であれば、主要な点を理解できる。その言葉が話されている地域にいるときに起こりそうな、たいていの事態に対処することができる。身近な話題や個人的に関心のある話題について、筋の通った簡単な文章を作ることができる。
基礎段階の言 語使用者	<b>A2</b>	ごく基本的な個人情報や家族情報、買い物、地元の地理、仕事など、直接的関係がある領域に関しては、文やよく使われる表現が理解できる。簡単で日常的な範囲なら、身近で日常の事柄について、単純で直接的な情報交換に応じることができる。
	<b>A1</b>	具体的な欲求を満足させるための、よく使われる日常的表現と基本的な言い回しは理解し、用いることができる。自分や他人を紹介することができ、住んでいるところや、誰と知り合いであるか、持ち物などの個人的情報について、質問をしたり、答えたりすることができる。もし、相手がゆっくり、はっきりと話して、助けが得られるならば、簡単なやり取りをすることができる。

(出典) ブリティッシュ・カウンシル、ケンブリッジ大学英語検定機構

# 各試験団体のデータによるCEFRとの対照表

CEFR	Cambridge English	英検	GTEC CBT	GTEC for STUDENTS	IELTS	TEAP	TEAP CBT	TOEFL iBT	TOEFL Junior Comprehensive	TOEIC / TOEIC S&W
C2	CPE (200+)				8.5-9.0					
C1	CAE (180-199)	1級 (2630-3400)	1400		7.0-8.0	400	800	95-120		1305-1390 L&R 945~ S&W 360~
B2	FCE (160-179)	準1級 (2304-3000)	1250-1399	980 L&R&W 810	5.5-6.5	334-399	600-795	72-94	341-352	1095-1300 L&R 785~ S&W 310~
B1	PET (140-159)	2級 (1980-2600)	1000-1249	815-979 L&R&W 675-809	4.0-5.0	226-333	420-595	42-71	322-340	790-1090 L&R 550~ S&W 240~
A2	KET (120-139)	準2級 (1284-1800)	700-999	565-814 L&R&W 485-674	3.0	150-225	235-415		300-321	385-785 L&R 225~ S&W 160~
A1		3級-5級 (419-1650)	-699	-564 L&R&W -484	2.0					200-380 L&R 120~ S&W 80~

英検：日本英語検定協会 <http://www.eiken.or.jp/forteachers/data/cefr/>  
[http://www.eiken.or.jp/association/association/info/2015/pdf/20151218\\_pressrelease\\_CSE2.pdf](http://www.eiken.or.jp/association/association/info/2015/pdf/20151218_pressrelease_CSE2.pdf)

TOEFL：米国ETS <http://www.ets.org/Media/Research/pdf/RM-15-06.pdf?WT.ac=clk>

IELTS：ブリティッシュ・カウンシル（および日本英語検定協会）資料より

TEAP：第1回 英語力の評価及び入試における外部試験活用に関する検討会 吉田研作教授資料より

Cambridge English（ケンブリッジ英検）：ケンブリッジ大学英語検定機構 <http://www.cambridgeenglish.org/exams-and-qualifications/cefr/cefr-exams/>  
<http://www.cambridgeenglish.org/exams/cambridge-english-scale/>

GTEC：ベネッセコーポレーションによる資料より  
「L&R&W」の記載が無い数値が4技能の合計点

TOEIC：IIBC <http://www.toEIC.or.jp/toEIC/about/result.html>  
「L&R」または「S&W」の記載が無い数値が4技能の合計点

# 主な英語の資格・検定試験の概要

試験名	実施団体	受験人数	年間実施回数	成績表示方法	出題形式: 実施方式 (*1)	受験料
Cambridge English (ケンブリッジ英検)	ケンブリッジ大学 英語検定機構	国内人数非公開 ※全世界では約250万人	2-3回	上初級~特上級(5つ) 可否、スコア(80-230)、グレード	L, R, W: 紙 S: ペア面接	PET(B1) 11,880円~ KET(A2) 9,720円~ (*5)
実用英語技能検定	日本英語検定協会	約235.5万人 (H25実績)	3回	1級~5級 可否による表示 H27よりスコア併記予定	L, R: 紙/CBT (W): 紙 (S): 面接/CBT (*2)	2級: 5,000円 準2級: 4,500円
GTEC CBT	ベネッセコーポレーション Berlitz Corporation ELS Educational Services ※一般財団法人進学基準研究機構(CEES)と共催	非公表	3回 (H27)	0-1400点	L, S, R, W: CBT	9,720円
GTEC for STUDENTS	ベネッセコーポレーション Berlitz Corporation ELS Educational Services	約73万人 (H26実績)	2回	0-810点	L, R, W: 紙 (S): タブレット(*3)	3,080円 L, R, W (5,040円 L, R, W, S)
IELTS	ブリティッシュ・カウンシル、 ケンブリッジ大学英語検定機構 日本英語検定協会 等	約3万人 (H26実績) ※全世界では240万人	約35回	1.0-9.0 (0.5刻み)	L, R, W: 紙 S: 面接	25,380円
TEAP	日本英語検定協会	約1万人 (H26実績)	3回	80-400点	L, R, W: 紙 S: 面接 (*4)	15,000円
TOEFL iBT	テスト作成: ETS 日本事務局: CIEE	非公表	40-45回	0-120点 (4技能を各0-30点で評価)	L, S, R, W: CBT	230USドル
TOEFL Junior Comprehensive	テスト作成: ETS 日本事務局: GC&T	非公表	2-3回	0-352点	L, S, R, W: CBT	9,500円
TOEIC	テスト作成: ETS 日本事務局: IIBC	約236.1万人 (H25実績) ※TOEICプログラム全世界700万人	10回	10-990点 (L, R各5-495点)	L, R: 紙	5,725円
TOEIC S&W	テスト作成: ETS 日本事務局: IIBC	約1.5万人 (H25 実績) ※TOEICプログラム全世界700万人	24回	0-400点 (S, W各0-200点)	S, W: CBT	10,260円

\*1: L=Listening, S=Speaking, R=Reading, W=Writing

\*2: Wは1級・準1級、Sは3級以上

\*3: Sはオプション

\*4: L/R, L/R/Wでも受験可能

\*5: 実施試験センターにより異なることあり

# 主な英語の資格・検定試験の出題意図・語彙数 等

試験名	目的・出題意図	語彙数	国際通用性
Cambridge English (PET:CEFR B1)	英語圏における日常生活に必要なとされる実践的な英語力があるかを評価する	3,000語程度 (*1)	①約130カ国 ②英国、欧州、オーストラリア、ニュージーランド ③CaMLA(米国ミシガン大学)、OET(豪州)等
実用英語技能検定 (2級: CEFR B1)	英語圏における社会生活(日常・アカデミック・ビジネス)に必要な英語を理解し、使うことができるかを評価する	4,000語程度 (*2)	①約50カ国 ②アメリカ、オーストラリア、カナダ等 ③アジア6地域7団体およびCRELLA(英国)
GTEC CBT	英語を使用する大学で機能できる(アカデミックな)英語コミュニケーション力を測る	3,000～6,000語程度 (CEFR C1まで)	②北米(ELS Educational Services)
GTEC for STUDENTS	英語によるジェネラルな状況におけるコミュニケーション能力を測る	3,000語以下 ※タイプによって異なる (CEFRB2まで)	
IELTS	英語を用いたコミュニケーションが必要な場所において、就学・就業するために必要な英語力があるかを評価する	5,000～6,000語程度(*2)	①約140ヶ国以上 ②EU諸国、オーストラリア、カナダ、ニュージーランド、アメリカ等
TEAP	EFL環境の大学で行われる授業等で行う言語活動において英語を理解したり、考えを伝えたりすることができるかを評価する	2,000～5,000語程度 (タスクにより異なる) (*2)	③CRELLA(英国)
TOEFL iBT	高等教育機関において英語を用いて学業を修めるのに必要な英語力を有しているかを測ることを目的とする。	(R) 3,000語で90.45%をカバー 5,000語で95.37%をカバー (L) 3,000語で96.22%をカバー(*3)	①約130か国以上 ②英語圏(北米、オーストラリア、ニュージーランド等)、非英語圏(ドイツ、オランダ、トルコ、韓国等)
TOEFL Junior Comprehensive	英語を母国語としない中高生の英語運用能力を世界標準で評価する。	3,000語程度 98%の単語がセンター試験に出現(*4)	①8か国(実施国数拡大中、2技能については既に50か国以上)
TOEIC / TOEIC S&W	和文・英文和訳などの技術ではなく、身近な内容からビジネスまで幅広くどれだけ英語でコミュニケーションができるかということの評価する。	4,000語以上 (*5)	①約150か国

\*1: English Vocabulary Profile Wordsに基づいてカウントした概算 \*2: BNC(British National Corpus) \*3: BNC/COCA word-family lists < 第1回連絡協議会資料より > \*4: 2006年以降のセンター試験。グローバル・コミュニケーション&テストティング独自調査(2014年)

\*5: 外部リサーチャーが独自に行った調査結果「英検2級より多いがテレビ、ニュース番組よりは少ない」からの推計値

## ◇生徒・学生の英語力向上における活用例

### <高校の例>

- ○○高等学校  
コミュニケーション活動を重視した授業において、英検の過去問題を活用。生徒の意欲を引き出す。受験前には、英語科教員とALTで面接指導も実施。
- ○○高等学校、○○中学校  
スピーチコンテスト・ディベート大会や短期留学等の取組を進める中で、英語力向上の目標として資格・検定試験を活用

### <大学の例>

- スーパーグローバル大学等事業 採択大学  
入学時から卒業時における目標を設定し、定期的にTOEFL等の試験を受け、卒業時には、実践的なコミュニケーションが可能なグローバル人材を育成
- ○○大学  
大学で学習する際に必要とされる英語運用能力を正確に測定するテストを導入し、基準点を設け、入学者選抜の際にすると共に、入学後の習熟度別クラス編成にも活用することで、英語力向上のためのきめ細かな指導を実施

## ◇入試における換算方法等（例：出願要件、みなし満点、点数加算等）の例

### <いわゆる「みなし満点」>

- ○○大学（一般入試）  
TOEFL iBT71点以上  
TOEFL PBT530点以上  
英検準1級  
IELTS 4技能6.5以上のスコアまたは等級を所持している者については、大学入試センター試験の英語科目を満点とし換算して、合否判定を行う

### <点数加算の例>

- |                |            |
|----------------|------------|
| ➤ ○○大学         | ➤ ○○大学     |
| TOEFL 48点以上 5点 | 英検2級以上 10点 |
| 61点以上 10点      | 英検準2級 8点   |
| 79点以上 25点      | 英検3級 6点    |
| 100点以上 50点     |            |
- ○○高等学校  
推薦入試において英検3級以上で加算

### <出願要件の一部、英語試験免除>

- ○○大学  
【自己推薦入試等：免除】  
TOEFL68点以上（経済、商学関係）  
【英語運用能力特別試験：出願要件】  
TOEFL68点以上  
（法学・政治学、国際関係）
- ○○大学（一般入試）  
英検2級以上：英語学力試験を免除

### <高校入試の例>

- 大阪府における取組  
入学者選抜においてTOEFL iBT、IELTS、英検のスコア等を一定の得点に換算し、学力検査の英語の得点と比較して高い方の得点を学力検査の得点とする（平成29年度より開始）



## 6. 高大接統改革

# 新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた 高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について ～すべての若者が夢や目標を芽吹かせ、未来に花開かせるために～のポイント

本答申は、教育改革における最大の課題でありながら実現が困難であった「高大接続」改革を、初めて現実のものにするための方策として、高等学校教育、大学教育及びそれらを接続する大学入学者選抜の抜本的な改革を提言するものである。

## (1) 若者の多様な夢や目標を支える高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜への刷新

### (目指す未来の姿)

- 将来に向かって夢を描き、その実現に向けて努力している少年少女一人ひとりが、自信に溢れた、実り多い、幸福な人生を送れるようにすること。

これからの時代に社会に出て、国の内外で仕事をし、人生を築いていく、今の子供たちやこれから生まれてくる子供たちが、十分な知識と技能を身につけ、十分な思考力・判断力・表現力を磨き、主体性をもって多様な人々と協働することを通して、喜びと糧を得ていくことができるようにすること。

彼らが、国家と社会の形成者として十分な素養と行動規範を持てるようにすること。

我が国は今後、こうした目標を達成するよう、教育改革に最大限の力を尽くさなければならない。

- 生産年齢人口の急減、労働生産性の低迷、グローバル化・多極化の荒波に挟まれた厳しい時代を迎えている我が国においても、世の中の流れは大人が予想するよりもはるかに速く、将来は職業の在り方も様変わりしている可能性が高い<sup>1</sup>。そうした変化の中で、これまでと同じ教育を続けているだけでは、これからの時代に通用する力を子供たちに育むことはできない。

この厳しい時代を乗り越え、子供や孫の世代に至る国民と我が国が、希望に満ちた未来を歩めるようにするため、国は、新たな時代を見据えた教育改革を「待ったなし」で進めなければならない。

<sup>1</sup> アメリカの研究者による予測によれば、「2011年にアメリカの小学校に入学した子どもたちの65%は、大学卒業時に、今は存在していない職業に就く」とも言われている。

## (克服すべき課題)

- 「高大接続」実現の方策は、上に述べた未来の姿を実現するための一環とみなされるべきものである。しかしながら、現状の高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜は、知識の暗記・再生に偏りがちで、思考力・判断力・表現力や、主体性をもって多様な人々と協働する態度など、真の「学力」が十分に育成・評価されていない。
- また、特定の分野に強い関心をもち、その向上に夢を賭けて卓越した力を磨いている高校生や、「世界にトビタテ！」の精神でグローバルな課題に積極的に向き合う活力のある高校生、身近な地域の課題に徹底的に向き合い考え抜いて行動する高校生などが評価されずに切り捨てられがちである。

こうした状況では、それぞれの夢を育み、その中で自らを鍛えるとともに、秘められた才能などを伸ばすことはできず、未来のエジソンやアインシュタインとなる道や、世界を舞台に活躍する潜在力、地方創生の鍵となる問題の発見や解決を生み出す可能性の芽なども摘まれてしまう。

## (高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革)

- この状況を、高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の改革による新しい仕組みによって克服し、少年少女一人ひとりが、高等学校教育を通じて様々な夢や目標を芽吹かせ、その実現に向けて努力した積み重ねを、大学入学者選抜においてしっかりと受け止めて評価し、大学教育や社会生活を通じて花開かせるようにする。
- そのため、以下の改革に一体的に取り組む。
  - ◆ 高等学校教育については、生徒が、国家と社会の形成者となるための教養と行動規範を身につけるとともに、自分の夢や目標をもって主体的に学ぶことのできる環境を整備する。そのために、高大接続改革と歩調を合わせて学習指導要領を抜本的に見直し、育成すべき資質・能力の観点からの構造の見直しや、課題の発見と解決に向けた主体的・協働的な学習・指導方法であるアクティブ・ラーニングへの飛躍的充実を図る。  
また、教育の質の確保・向上を図り、生徒の学習改善に役立てるため、新テスト「高等学校基礎学力テスト(仮称)」を導入する。
  - ◆ 大学教育については、学生が、高等学校教育までに培った力をさらに発展・向上させるため、個々の授業科目等を越えた大学教育全体としてのカリキュラム・マネジメントを確立する(ナンバリング等)とともに、主体性を持って多様な人々と協力して学ぶことのできるアクティブ・ラーニングへと質的に転換する。
  - ◆ 大学入学者選抜においては、現行の大学入試センター試験を廃止し、大学で学ぶための力のうち、特に「思考力・判断力・表現力」を中心に評価する新テスト「大学入学希望者学力評価テスト(仮称)」を導入し、各大学の活用を推進する。

- ◆ 個別選抜については、学力の三要素を踏まえた多面的な選抜方法をとる<sup>※</sup>ものとし、特定分野において卓越した能力を有する者の選抜や、年齢、性別、国籍、文化、障害の有無、地域の違い、家庭環境等にかかわらず多様な背景を持った学生の受け入れが促進されるよう、具体的な選抜方法等に関する事項を、各大学がその特色等に応じたアドミッション・ポリシーにおいて明確化する。このために、アドミッション・ポリシー等の策定を法令上位置付けるとともに、大学入学者選抜実施要項を改正する。

※選抜性の高低に則し改革すべき点については、別添「大学入学者選抜改革の全体像(イメージ)」の通り。

- さらに、各大学が、新たな大学入学者選抜実施要項に基づく新たなルールに則って改革を進めることができるよう、大学にとって改革のインセンティブとなるような財政措置等の支援を行う。

## (2) グローバル化に対応したコミュニケーション力の育成・評価

- グローバル化の進展の中で、言語や文化が異なる人々と主体的に協働していくため、国際共通語である英語の能力の向上と、我が国の伝統文化に関する深い理解、異文化への理解や躊躇せず交流する態度などが必要である。
- なかでも、真に使える英語を身に付けるため、単に受け身で「読む」「聞く」ができるというだけではなく、積極的に英語の技能を活用し、主体的に考え表現することができるよう、「書く」「話す」も含めた四技能を総合的に育成・評価することが重要である。  
「大学入学希望者学力評価テスト(仮称)」においては、四技能を総合的に評価できる問題の出題(例えば記述式問題など)や民間の資格・検定試験の活用を行う。また、高等学校における英語教育の目標についても、小学校から高等学校までを通じ達成を目指すべき教育目標を、「英語を使って何ができるようになるか」という観点から、四技能に係る一貫した指標の形で設定するよう、学習指導要領を改訂する。

## (3) 学習指導要領の改訂も含めた高等学校教育改革の実現

- 高等学校の学習指導要領は、多様な若者の夢や目標を支援できる高等学校教育の実現を目指し、①「何を教えるか」ではなく「どのような力を身に付けるか」の観点に立って、②そうした力を確実に育むため、指導内容に加えて、学習方法や学習環境についても明確にしていく観点から抜本的に見直す。
- 具体的には、高等学校の学習指導要領を通じて、どのような資質・能力を育成しようとしているのかをより明確化するとともに、例えば、以下のような見直しを行う。

なお、育成すべき資質・能力の明確化に当たっては、教育基本法や学校教育法の目的・目標のほか、OECDのキー・コンピテンシーや、国際バカロレアが目指す論理的思考力や表現力、探究心等の育成などの考え方も参考にしつつ検討する。

- ◆「思考力・判断力・表現力」を育成するための課題の発見と解決に向けた主体的・協働的な学習・指導方法の飛躍的充実
- ◆国家や社会の形成者となるための教養・行動規範、また自立して社会生活を営むために必要な力を、実践的に身に付けるためのカリキュラムを充実させること
- ◆高度な思考力・判断力・表現力を育成・評価するための新たな教科・科目を検討すること
- ◆大学の卒業論文のような課題探究を行う「総合的な学習の時間」の一層の充実に向けた見直し
- ◆特別支援教育の充実のための見直し

#### (4) 「公平性」をめぐる社会の意識改革

- 現在の大学入試、特に一斉にかつ画一的に実施される試験で、あらかじめ設定された正答に関する知識の再生を一点刻みに問い、その結果の点数のみによる選抜を「公平」であると捉える既存の意識を改革し、それぞれの若者が、自分の夢や目標を持ち、その実現に必要な能力を身に付けることができるよう、それぞれの学びを支援する観点から、一人ひとりが積み上げてきた多様な力を多様な方法で「公正」に評価し選抜することが必要であるという意識を醸成するため、社会的な議論を深めることが必要である。

#### (5) 改革実現のための「高大接続改革実行プラン(仮称)」の策定

- 国は、本答申をもとに、改革の具体策やスケジュールの詳細を「高大接続改革実行プラン(仮称)」としてまとめ、すみやかに策定・公表し、強力に推進する。  
プランにおいては、アドミッション・オフィスの強化、アドミッション・ポリシーの明確化を含む、各大学における個別選抜の改革と教育の質的転換を実現するための実効的な政策手段や、新テストの制度設計と実施主体の在り方、高等学校学習指導要領の在り方を含めた高等学校教育改革、評価方法の改革等について、中央教育審議会において進行している議論の状況も踏まえつつ、可能な具体策と、今後の検討スケジュールを示す。
- 新しい時代に求められる教育の在り方を踏まえ、更なる検討が必要な点については、プランに示されたスケジュールに基づき検討を進め、成果を得たものから順次公表するものとする。

## ① 高等学校教育改革

- ◆ **学習指導要領の抜本的見直し、アクティブ・ラーニングの視点からの学習・指導方法の改善。**
- ◆ **生徒の学習意欲の喚起・学習改善を図るとともに、指導改善等に生かすことにより、高校教育の質の維持・向上を図るため、「高等学校基礎学力テスト(仮称)」を導入。**

## ② 大学入学者選抜改革

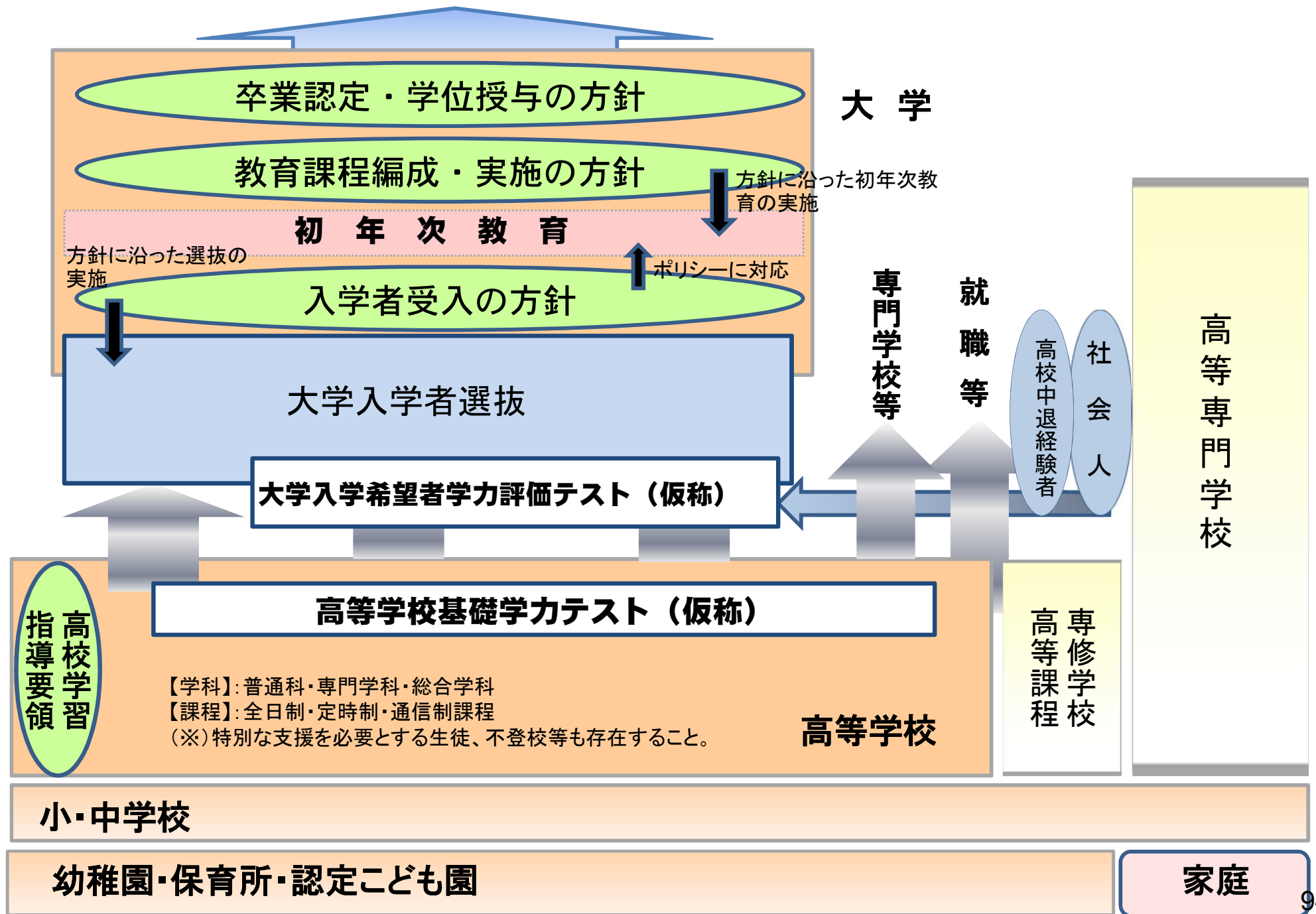
- ◆ **各大学の個別選抜は、入学者受入れの方針(アドミッション・ポリシー)の明確化と、その内容の入学者選抜方法への具現化を通じて、多面的な選抜方法をとるものに改善。**
- ◆ **知識・技能を十分有しているかの評価も行いつつ、「思考力・判断力・表現力」を中心に評価する「大学入学希望者学力評価テスト(仮称)」を導入。**

## ③ 大学教育改革

- ◆ **入学者受入の方針のほか、教育課程編成・実施の方(カリキュラム・ポリシー)、卒業認定・学位授与の方針(ディプロマ・ポリシー)の一体的策定・公表と、カリキュラム・マネジメントの確立。認証評価制度の改革。**
- ◆ **アクティブ・ラーニングへと質的に転換。**

# 初等中等教育から大学教育までの一貫した接続イメージ(高大接続改革の全体像)

社会への送り出し (学校教育の入り口から出口まで一貫して社会との関係を重視)

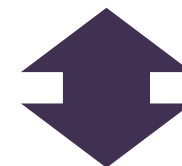


# 高等学校教育の質の確保・向上に向けた全体的な取組について

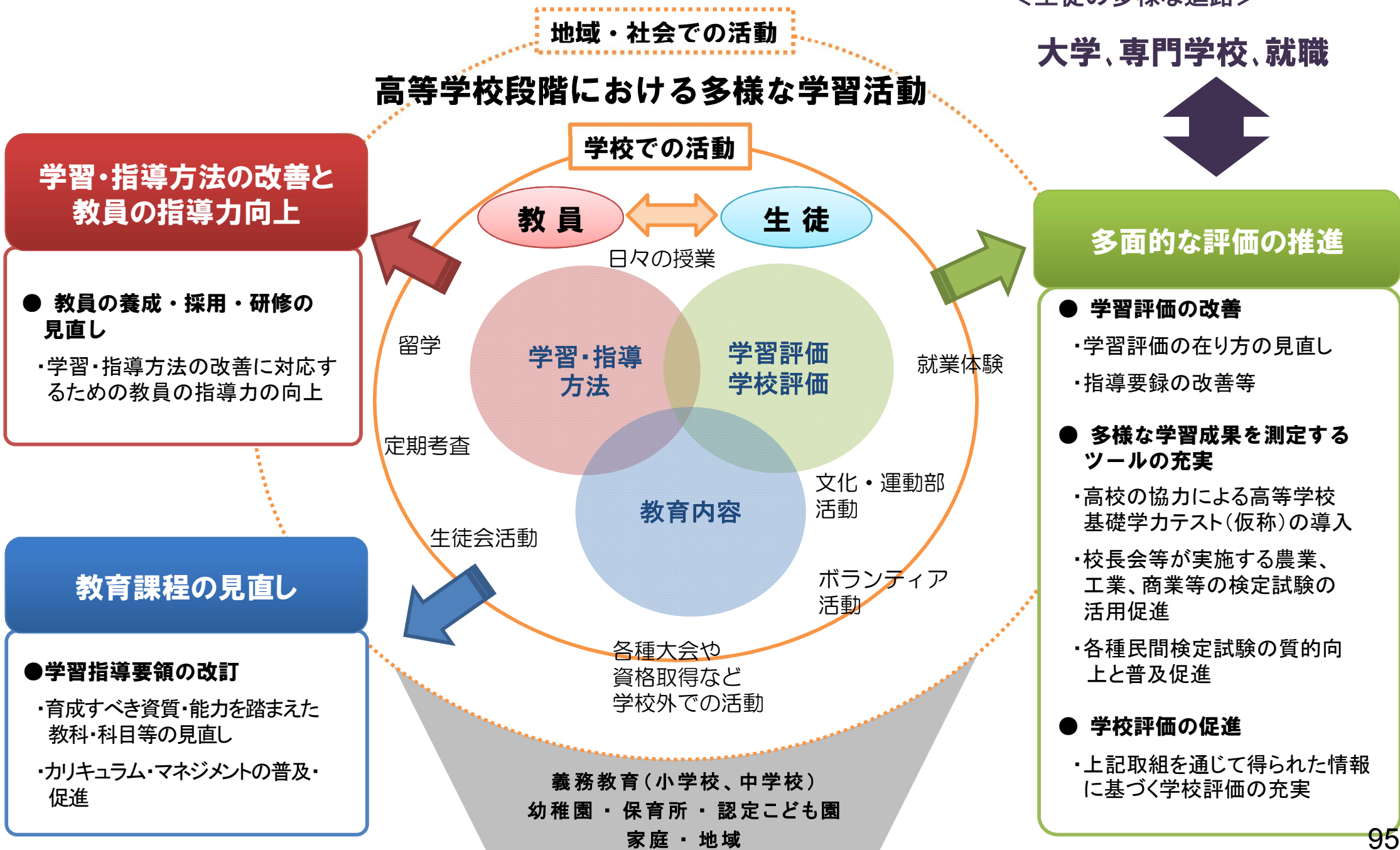
～ ICT活用をはじめとする様々な教育活動を通じ、生徒の主体的・協働的な学習の確立を目指す～

＜生徒の多様な進路＞

大学、専門学校、就職



## 高等学校段階における多様な学習活動

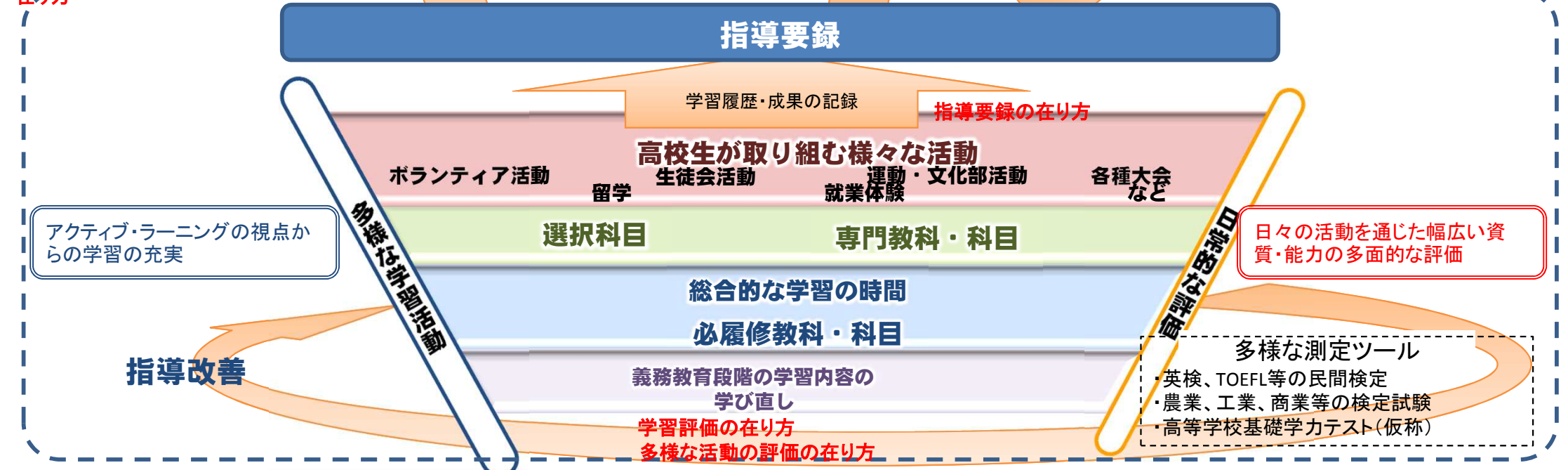
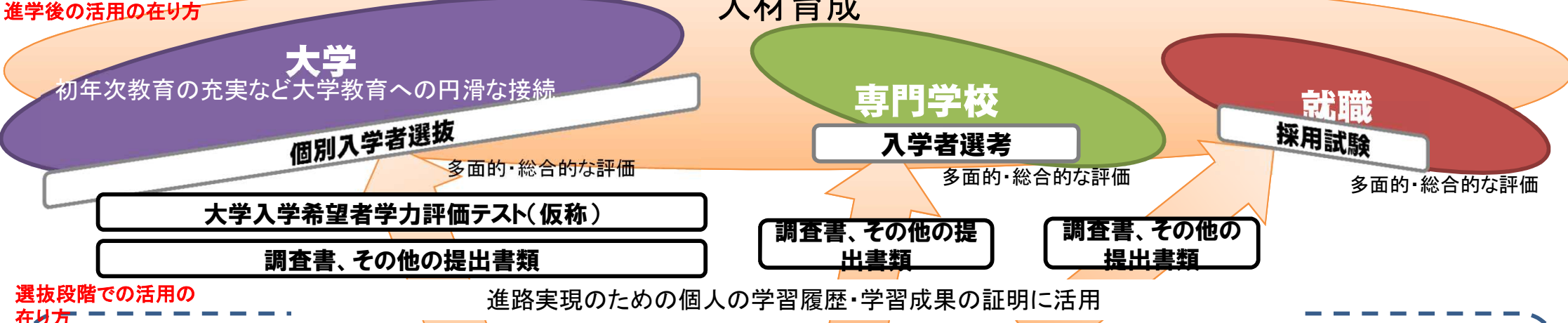




# 多様な学習活動や学習成果を適切に評価する仕組みの構築(イメージ)

☆日々の活動を通じて育成される幅広い資質・能力について多面的に評価  
 →学習評価の結果や把握した基礎学力の定着度等の生徒への指導改善や教材研究等への反映  
 →大学等への進学や就職等における個人の学習履歴・学習成果の証明に活用  
 →高等学校における学習と大学における学修等との接続のために活用

**高等学校段階の教育・評価の充実から、進学・就職時における多面的・総合的な評価の推進、その後の教育活動・人材育成までを視野に入れた評価の仕組みを構築**



## 基本的事項

### 【目的】

- 「義務教育段階の学習内容を含めた高校生に求められる基礎学力の確実な習得」と「それによる高校生の学習意欲の喚起」に向けて、高等学校段階における生徒の基礎学力の定着度合いを把握・提示できる仕組みを設ける。これにより、
  - ・ 生徒の基礎学力の習得と学習意欲の向上を図るとともに、
  - ・ 学校が、客観的でより広い視点から自校の生徒の基礎学力の定着度合いを把握し、指導を工夫・充実する
  - ・ 設置者等が基礎学力定着に向けた施策の企画・立案や教員配置、予算等を通じた学校支援の実施に取り組むことを通じ、高等学校教育の質の確保・向上のためのPDCAサイクルを構築。
- 国は、基礎学力テストの実施を通じ、高校生の基礎学力の定着状況や学習に関する状況等を全国的な視点で把握し、その結果を設置者等へ提供すること等により、PDCAサイクルの構築に向けた取組を促進する。

### 【対象者】

- 学校又は設置者の判断により、学校単位で受検することを基本とする。
- 希望する個人の受検も可能とし、現役の高校生だけでなく、高等専修学校に在籍する生徒、既卒業者等、生涯学習の観点からについても広く受検が可能となるようにする。

### 【問題の提供等の仕組み】

- 高校等において使用されている問題の収集、高校教員等の参画を得た新規問題の作成等を通じて、アイテムバンクに大量の問題を蓄積。その大量の問題群から複数レベルの問題のセットを構築し、学校が適切な問題のセットを選んで受検できる仕組みとする。

### 【定着度合いを把握し結果提供するための方法】

- 集団における相対的な位置ではなく、生徒の基礎学力の定着度合いを把握し、段階表示で結果を提供する方法を、今後、検討・精査。

### 【多様な関係者との協働体制構築】

- 高等学校教育の質の向上のため、教育委員会関係者、義務教育段階の学校の教員、民間団体等、多様な関係者が連携協力して取り組むことができる体制を構築。

## 具体的事項

### 【対象教科・科目】

- 円滑に導入する観点から、平成31年度の試行実施期からは、国語、数学、英語で実施。  
(一部の教科・科目のみを選択した受検を可能とする。)
  - ※ 原則として、必修科目である「国語総合」、「数学Ⅰ」、「コミュニケーション英語Ⅰ」を上限とし、出題範囲の中に義務教育段階の内容も一部含める。
  - ※ 英語については、「聞くこと」、「話すこと」、「読むこと」、「書くこと」の四技能を測ることができる問題構成とすることを前提に、「話すこと」、「書くこと」の具体的な実施方法等については、更に検討。
- 平成35年度以降は、新学習指導要領における必修科目を踏まえた教科・科目の構成とする。

### 【問題の内容】

- 「学力の3要素」のうち、基礎的な「知識・技能」を問う問題を中心としつつ、「思考力・判断力・表現力」を問う問題をバランスよく出題。
- 結果から、平均的な学力層や学力面で課題のある層における基礎学力面の定着度合いをきめ細かく把握することができるように出題。
  - ※ 受検については、基礎学力テストの目的や出題内容等を踏まえ、学校、設置者又は受検者が適切に判断。
  - ※ 受検することが基礎学力の定着を目指す積極的な取組として社会的に評価されるよう普及啓発等を行う。

## 「高等学校基礎学力テスト(仮称)の制度設計のポイント(高大接続システム改革会議最終報告より)(2/2)」

### 【出題・解答・成績提供方式】

- 難易度の設定に留意しつつ、「選択式」や「記述式」など多様な解答方式を導入する。
- CBTの導入については、学校内に配備されているコンピュータを活用する方式(インハウス方式)をベースに検討。紙によるテスト実施も念頭に置きつつ検討。
- IRTの導入については、指導の工夫・充実のために問題等の公表が期待されることも踏まえつつ、更に詳細に検討。
- 本人の基礎学力の定着度合いを段階表示で提供(学校単位で受検する場合は、当該学校に対して各生徒の結果を提供するとともに、都道府県に対して管内の各学校の結果を提供)※ 分野別の結果など、指導の工夫・充実に資する情報も提供。各学校や生徒等の順位は示さない。

(注)CBT: Computer-Based Testingの略称。コンピュータ上で実施する試験。

IRT: Item Response Theory(項目反応理論)の略称。この理論を用いることによって複数回受検する場合に回ごとの試験問題の難易度の差による不公平を排除することが可能となる。なお、導入のためには、事前に難易度推定のために全ての問題について予備調査することや多量に問題をストックすることが必要。(例TOEFL,医療系大学間共用試験等)

### 【実施回数・時期・場所】

- 学校における指導の工夫・充実に資するよう、各学校の科目履修の進捗状況を踏まえながら、教育課程編成や学校行事等を勘案しつつ、学年や時期、教科・科目等に関し、学校又は設置者において適切に判断できる仕組みとする。
- 正規の教育課程の中でも受検しやすくなるよう、1科目当たりの実施時間は50分～60分程度とする。
- 学校単位で受検する場合には、原則、当該学校で実施。個人で受検する場合の実施場所については、受検希望の動向を踏まえながら、高等学校や公の施設での利用などを含めて検討。

### 【受検料】

- 受検料は、1回あたり数千円程度の低廉な価格設定となるよう、費用負担の在り方について検討。また、低所得者世帯への支援策の在り方についても併せて検討。

### 【結果活用の在り方】

- 生徒自身による学びの質の向上や、各学校における指導の工夫・充実に生かすとともに、国や都道府県等における教育施策の改善等に生かす。
- 平成31年度から平成34年度の「試行実施期」においては、大学入学者選抜や就職等には用いず、本来の目的である学習改善等に用いながら、その定着を図ることとし、そこで得られた実証的データや関係者の意見を踏まえながら検証を行い、必要な措置を講じる。  
平成35年度以降の大学入学者選抜や進学・就職等への活用方策については、仕組みの定着状況やメリット・デメリットを十分に吟味しながら、関係者の意見を踏まえ、更に検討。

### 【民間事業者の活用】

- 基礎学力テストの趣旨・目的を達成していくための民間団体との効果的な連携の在り方について、安定性・継続性等の確保を図りながら、具体化する。

### 【名称】

- 高等学校段階で共通して習得することが期待される学力の定着度の診断、検査、検定等をベースに、その目的・性質に応じた適切な名称となるよう、新テストの実施方針(平成29年度初頭)までに確定。

### 【今後の検討体制】

- 「最終報告」後、文部科学省において、関係団体等の理解・協力を得ながら、実証的・専門的検討を行い、新テストの実施方針(平成29年度初頭)に反映。

## 【目的・対象者】

- 大学入学希望者を対象に、これからの大学教育を受けるために必要な能力について把握することを主たる目的とし、**知識・技能を十分有しているかの評価も行いつつ、「思考力・判断力・表現力」を中心に評価。**

## 【対象教科・科目】

- 次期学習指導要領下における基本的枠組み(平成36年度～)
  - ・ 次期学習指導要領の趣旨を十分に踏まえ、特に思考力・判断力・表現力を構成する諸能力をより適切に評価。
  - ・ 次期学習指導要領での導入が検討されている「数理探究(仮称)」や、教科「情報」についても出題。
- 現行学習指導要領下における基本的枠組み(平成32～35年度)
  - ・ 次期学習指導要領改訂の議論の方向性を勘案するとともに、大学教育を受けるために必要な諸能力をより適切に評価。
  - ・ 試験の科目数については、できるだけ簡素化。

## 【マークシート式問題】

- **より思考力・判断力・表現力を重視した作問へ改善。**

(例) 正解が一つに限られない問題、正解を選択させるのではなく、数値や記号等を直接マークさせる問題など

- 評価結果は、現在よりも多くの情報(例えば、各科目の領域ごと、問ごとの解答状況も合わせて提供するなど)を各大学に提供。

## 【記述式問題】

- 今後どのような分野においても主体性を持って活動するために重要となる、複数の情報を統合し構造化して新しい考えをまとめる思考・判断の能力や、その過程を表現する能力の評価のため、**記述式問題を導入**。
- **共通テストに記述式を導入することにより、高等学校教育を生徒の能動的な学習をより重視したものに改善**。諸外国の大学入学資格試験でも記述式は多い。  
(例) 英国のGCE-Aレベル、独のアビトゥーア、仏のバカロレアなど
- 国立大学の二次試験のような**解答の自由度の高い記述式ではなく、設問で一定の条件を設定し、それを踏まえて結論や結論に至るプロセス等を解答させる「条件付記述式」を中心に作問。対象は、当面、国語、数学**。  
※ 平成32～35年度:短文記述式、平成36年度～:より文字数の多い問題を導入
- 評価結果は段階別表示。
- 採点業務を効率的・安定的に実施するための補助として、答案のクラスタリング(類似した解答ごとにグループ化)などの業務にコンピュータを効果的に活用することも含め、新たな技術の開発と活用を積極的に進める。
- **実施時期については、高等学校教育への影響や大学入学者選抜の合否判定のタイミング等に関する関係者の意見も聞きながら、マークシート式問題と同日に実施する案、マークシート式問題とは別の日に実施する案のそれぞれについて、十分に検討**。

### 【英語の多技能を評価する問題】

- **四技能の評価を推進**。「話すこと」については、環境整備や採点等の観点から、32年度からの実施可能性について十分に検討。

### 【複数回実施】

- **日程上の問題、CBTの導入や等化等による資格試験的な取扱いの可能性などを中心として、引き続き検討**。

### 【今後の検討体制】

- 「最終報告」後、文部科学省において、**関係団体等の参画を得て、改革の狙いを具体化するための方法等について実証的・専門的に検討、新テストの実施方針(平成29年度初頭)に反映**。

# 「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」の各教科において、 大学教育を受けるために必要な能力としてどのような力を評価すべきか？（案）

## 1. 総論

今後の社会の在り方やその変容の動向を踏まれば、大学入学者選抜においては、大学における学修や社会生活において必要となる問題発見・解決の能力、すなわち、主体性を持って多様な人々と協働しながら、問題を発見し、その解決策をまとめ、実行するために必要な諸能力を有しているかどうかを評価することが一層重要となる。（詳細は次ページのイメージ参照。）

⇒ そのためには、「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」においては、各教科の知識をいかに効率的に評価するかではなく、特に、

- ①内容に関する十分な知識と本質的な理解を基に問題を主体的に発見・定義し、
- ②様々な情報を統合し構造化しながら問題解決に向けて主体的に思考・判断し、
- ③そのプロセスや結果について主体的に表現したり実行したりするために必要な諸能力をいかに適切に評価するかを重視すべき。

このような諸能力を働かせることが必要となる状況をいかに設定し評価するかという観点から作問を行う。

⇒ 大学教育においてはこうした諸能力をさらに磨いていくことを重視する、また、高等学校教育においても、多様な進路に応じて必要な能力を伸ばす中で、こうした諸能力の育成を重視するという、メッセージとセットで打ち出すことが必要。

## 2. 求められる諸能力の育成のために各教科で重視すべきプロセス

### <国語>

例えば、  
多様な見方や考え方が可能な題材に関する文章や図表等から得られる情報を整理し、概要や要点等を把握するとともに、他の知識も統合して比較したり推論したりしながら自分の考えをまとめ、他の考えとの共通点や相違点等を示しながら、伝える相手や状況に応じて適切な語彙、表現、構成、文法等を用いて効果的に伝えること。

### <数学>

例えば、  
事象から得られる情報を整理・統合して問題を設定し、解決の構想を立て、数量化・図形化・記号化などをして数学的に表現し、考察・処理して結果を得、その結果に基づきさらに推論したり傾向や可能性を判断したりすること。

### <理科>

例えば、  
観察した自然事象の変化や特徴を捉え、そこから得られる情報を整理・統合しながら、問題を設定し仮説を立て予測し、それらを確認するための観察・実験を計画して実践し、得られた結果から傾向等を読み取ったり、モデルや図表等で表現したりするとともに、結果に基づき推論したり、改善策を考えたりすること。

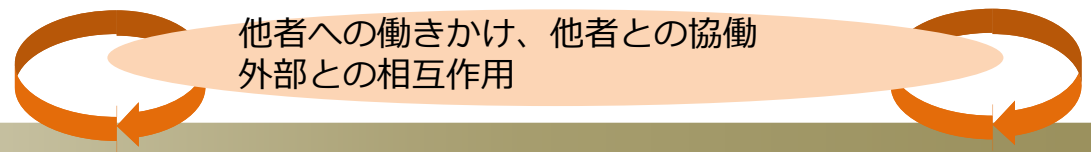
### <地理歴史（世界史）>

例えば、  
文章や年表、地図、図表等の資料から、歴史に関する情報を整理し、その時代の人々が直面した問題や現代的な視点からの課題を見だし、その原因や影響、あるいは解決策等についての仮説を立て、諸資料に基づき多面的・多角的に考察し、その妥当性を検証し考えをまとめ、根拠に基づき表現すること。

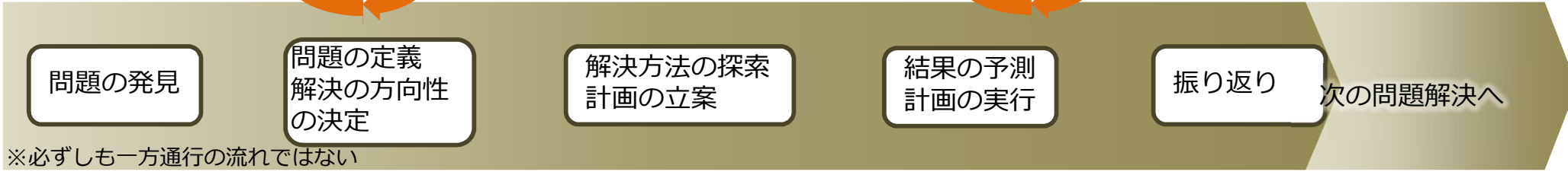
### <英語>

例えば、  
多様な見方や考え方が可能な幅広い話題・問題に関する情報を聞いたり英文や図表などを読み取り、情報を整理しながら概要や要点を把握し、得られた情報を統合するなどして活用しつつ、様々な見方や考え方の共通点や相違点等を示しながら、自分の考えや主張を適切な語彙、表現、文法等を用いて効果的に伝えること。

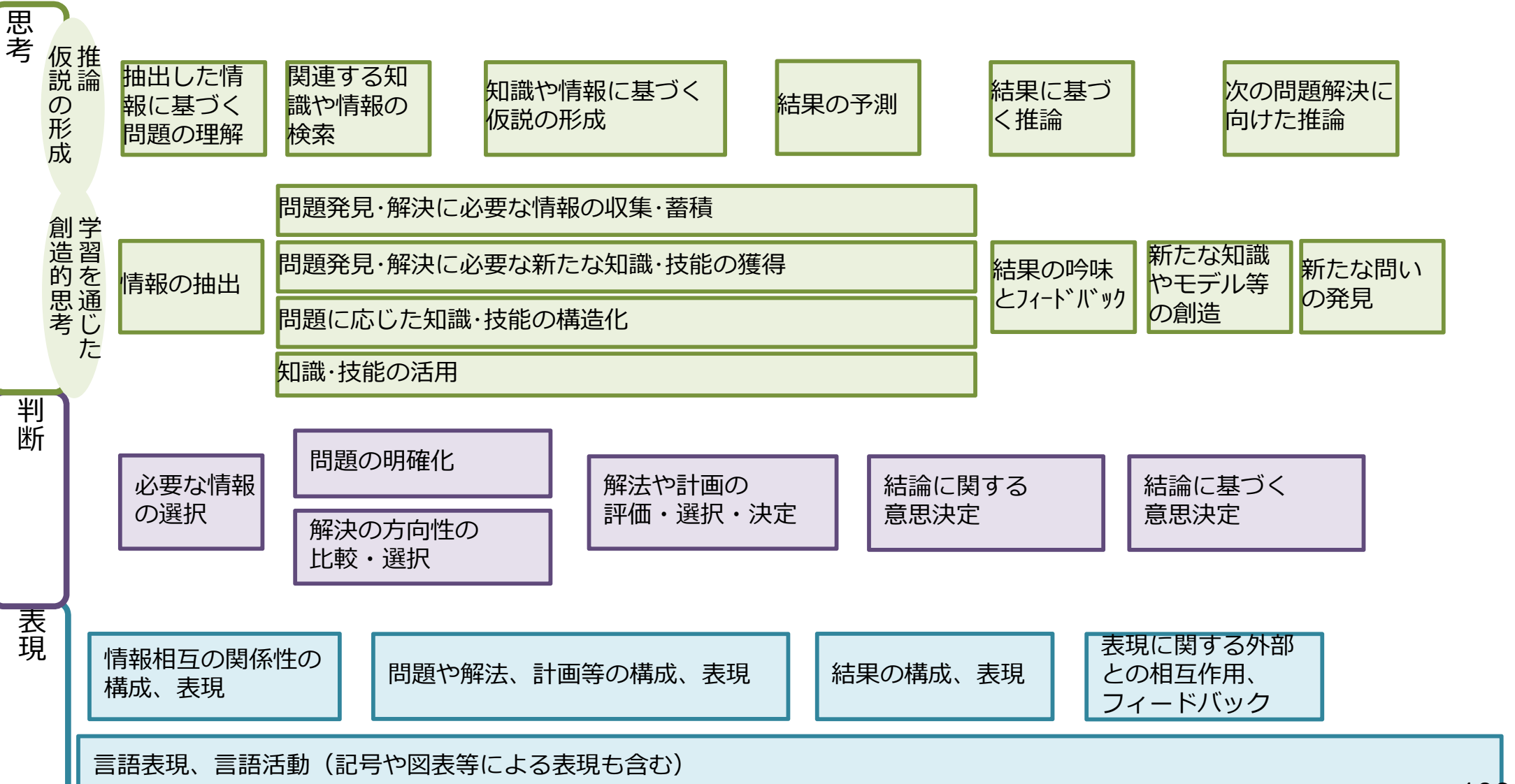
中央教育審議会教育課程企画特別部会の各教科等別ワーキンググループにおいて、資質・能力や問題発見・解決の学習プロセスの中で働く思考・判断・表現等を検討中。



問題発見・解決  
のプロセス



プロセスの中で働く思考・判断・表現等のうち、特に重視すべきものの例





## (案)「英語」において特に重視すべき思考力・判断力・表現力等の例

「聞く」「読む」「話す」「書く」の4技能をバランス良く総合的に育成するとともに、複数の領域を統合的に活用し、情報や考えなどを的確に理解したり、目的に応じたコミュニケーションのプロセスを通じて適切に伝えたりする思考力、判断力、表現力。

(例)

### 〈「聞くこと」の領域〉

- まとまりのある英文、比較的長い対話文、スピーチ、プレゼンテーション、講義などを聞き、複数の情報を整理するなど思考・判断して、必要な情報を得たり概要や要点を把握したりする力。

### 〈「読むこと」の領域〉

- まとまりのある英文、比較的長い対話文、英語で書かれた図表などを読み、複数の情報を整理・統合するなど思考・判断して、必要な情報を得たり概要や要点を把握したりする力。

### 〈「話すこと」の領域〉

- (発表)多様な考え方ができる話題や時事問題・社会問題などについて話して説明するとともに、自分の意見や考えなどをまとめ、適切な語彙・表現・文法を用いて論理的・批判的に話して伝える力。
- (やり取り)身近な話題や知識のある話題について、情報や意見について交換するとともに、自分の意見や考えをまとめ、適切な語彙・表現・文法を用いて伝え合う力

### 〈「書くこと」の領域〉

- 多様な考え方ができる話題や時事問題・社会問題などについて、自分の意見や考えなどをまとめ、論点や根拠を明確にしながら、適切な語彙・表現・文法を用いて論理的・批判的に書いて伝える力。

### 〈技能統合の領域〉(4技能のうち2技能以上を統合的に活用)

- 聞いたり読んだりして得た情報(英文や図表など)について、その概要や要点を的確に把握するとともに、自分の意見や考えなどとの共通点や相違点などを示しながら、論理的・批判的に話したり書いたりして表現する力。